
アマギディオンの　～いつか見た空の青の下で～

東樹　九林

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アマギデイオン ～いつか見た空の青の下で～

【Nコード】

N8544C

【作者名】

東樹 九林

【あらすじ】

国連大学付属魔法学校に在籍する少年、ヤグチコウキは青藍・純白・黄金の三大色素が鮮やかな美女とともに世界が滅びる夢を見る。恐怖を覚えながら目覚めたコウキは、夢の中の美女・デイドの娘、エリーシャに、己が身の定めを告げられた。滅びかけた世界の為に7日限定で甦った『廃兵』（アンバリッド）として人類を滅ぼそうとする『刺客』（ミゼリコルディア）を倒す義務を負わされる。しかし、肝心のコウキは記憶も能力も喪失していた…

プロローグ

青。

空は、一面の、青。

透明を幾重にも幾重にも織り込んで、初めて生まれる繊細なその色の名前は 青

風を受けて大きく畝^{うね}る草原の緑に身を横たえて、僕は空を……空の青を見ていた。

一点の曇りも無く晴れ渡る空に、この星で最も有り触れていて、そして最も優しい色が広がっている。

澄み切った青の、なんと美しいことだろう。

僕はこの星にある無限の色彩の中で空の青が最も好きだ。

青は、この星を包む大気の色。

無慈悲なる暗黒宇宙から、この星の生命を護る無数の優しさが連なってきた色……それが、『青』。

だから、僕は、空の青が大好きだ。

視界の全てを青一色に染め抜いて、僕は目を閉じる。その後、意識に一瞬前まで見ていた鮮やかな青を思い浮かべ、瞳に焼き付けた。

忘れないように。

この繊細な色を、決して忘れないように。

羽ばたく鳥を縛るものは何も無く、吹く風を遮るものなどどこにも無い。

静かな……静かな時間だった。

世界の終焉^{おわり}に相応しい、静かで、穏やかな時間だった。

どれほどの時が経ったのか、無人だった草原に俄かに人の気配。

「いつまでのんびり寝てるの……コウキ君」

自分と呼ぶ女性の声に、僕は目を開いた。

一人の女性が、寝転んでいる僕の傍に立って、僕の顔を覗き込んでいた。

世界に、新たな色が加わる。

先ず、黄金。

それは陽の光を受けて豪奢に輝く、癖の無いまっすぐな彼女の髪の毛の色。

次に、純白。

それは絹よりも滑らかで、肌理きめの細かい彼女の肌の色。

そして、青。

僕の好きな空の青と同じく優しい青は彼女の瞳の色。

黄金・純白・青……それが、彼女を構成する三大色素。鮮烈なその色素が、僕の視界に焼き付けられる。

「デイド？」

見知った人の、見慣れぬ思いつめた表情に、戸惑う。

「……捜したわ」

強張った顔、硬く緊張した声。純白の顔に、血の気は薄い。

「隣……いい？」

溢れ出しそうな感情を必死で押し殺そうとして、されども青い瞳の端に浮かぶ水色が彼女の心を表していた。

僕が無言で頷くと、デイドは僕の隣へ膝を抱くようにして座る。

彼女の体温を感じるには遠く、されども彼女の甘い香りが届く位には、近い。そんな、微妙な距離。

それっきり、彼女は無言。

風が吹く度に彼女の黄金が翻るが、デイドはそれを押さえようとせず、風に吹かれるがままにしていた。彫像になってしまったかのように微動だにせず、ただ、ただじっと空を見ている。

訪れた、沈黙。

デイドは、口を開く事無く空の青色を見つめている。僕の真似を

するように。しばし、二人で空を見上げる。

じっと、空を見ているデイド……を、僕はじっと見ている。

視界に入り込むデイドの横顔は、見る者が思わず平伏してしまいそうな、女王としての気品と風格すら滲ませる絶佳の美貌。美の女神すら嫉妬しそうなほどに、人間が想像しうる理想的な美の具現の一つ、女性のあらゆる美貌を兼ね備えた完璧な存在。

その外見と性格と能力から『神仙女王』とデイドが評されるのも不思議ではない。

「空……綺麗ね」

十分以上の沈黙を破ったのは、デイドの方からだった。言葉の爽やかさとは裏腹に、口調は重い。

「世界がこんなことになって、改めて空を見上げてみると……コウキ君がいつも空が好きだって言ってた事が、今……やっと分かった気がするわ」

風に吹かれるがままにしていた金髪を手で押さえ、デイドは僕の方を振り向く。

「今更分かって……遅すぎ、なんだけどね」

溜息とともに浮かべるのは、泣き出しそうな笑顔。取り返しの付かないほどの大きな後悔と、ほんの少しの喜びが^な縋^まい交ぜになったその表情。

……遅すぎ。

デイドの言葉が僕の胸で^{リフレイン}反復する。そう、全ては遅すぎた。何もかも、全てが、遅すぎたんだ。

失う事になって初めて、人はその重要性に気づく。そして、取り戻そうとしても、最早どうにもならない。それが日常に近ければ近いほど、人はそれに注意を向けることは少ないのだから。

僕から顔を背けて、涙を拭うデイド。

「一つだけ、約束してくれる……………」

泣き笑いの表情のまま、そっと顔を近づけてくるデイド。彼女の甘い香りばかりでなく彼女の体温が伝わる距離に。

「な、なに？約束って」

答える僕の声は思わず裏返っている。

嘗て無かったほどに接近したデイドの顔。吸い込まれそうな空のように青い瞳、天に座す月のように白い肌、太陽よりも輝く黄金の髪が、あと、ほんの、すこし、顔を動かすだけで触れ合いそうなほどに、近い。

「…………この空の青の下で」

ぽつりと……………呟く言葉。甘い吐息が顔に掛かる。

「また、いつか、必ず……………再会しよう」

僕を見下ろすデイドの顔は、優しい微笑みを浮かべていた。

悲しいくらい、優しい微笑み。今まで、どんな時にも浮かべた事のないタイプの笑顔。瞳には涙の跡。

叶えられる事のない

約束。

今日日本日只今この時世界は終焉^{おわ}る、空は塗り潰される、希望は潰える、僕は消える、もう二度と人類は地球に帰れない…こんな約束、叶うはずが、無い。

デイドは、本来不毛なものを極端に嫌う現実主義者^{リアリスト}だ。叶えられない約束は絶対にしない……………そんな彼女からの、果たされる筈のない約束。

その約束がどんなに虚しいものだと思っても…

「そうだね……………うん」

僕は頷くしかない。

「約束しよう、またいつか……………いつの日か……………こんな青空の下で必ず再会するって」

言葉にするのは容易く、そして実行は激しく困難な……約束。だが、それを敢えて口にすることで絶望しかない未来に、ささやかな希望の種を蒔いた気がした。

「ええ、約束よ」

につこり笑ったデイドが、颯爽と立ち上がる。

「約束したんだから、絶対に叶えるように努力しましょう……私も、あなたも」

身長百七十センチの高さから僕を見下ろすデイドの顔には、いつもどおりの溢れんばかりの自信と、若干の照れが入り混じっていた。どちらからともなく、僕らの顔に笑みが零れる。

最後に、デイドの笑顔が見れてよかった。心の底からそう思う。

しかし、僕らの笑顔は瞬時に凍りついた。

ゴーーーーーオオオオオオン

ゴーーーーーオオオオオオン

世界の終了の鐘が鳴る。おわり

ゴーーーーーオオオオオオン

ゴーーーーーオオオオオオン

地の底から、空の上から、海の中から、木の虚から、大地の割れ目から、世界のありとあらゆる所から鳴り響く鐘の音に、僕はゆっくりと身体を起こす。

「もう時間？……いやね、別れを惜しむ間もないじゃない」

眉間に皺を寄せて、不快気に顔を顰めるデイド。

鐘の音が一つ鳴り響く度に、闇よりもなお暗い黒雲、まるで地獄の底から湧き立つような不吉な影が世界から光を奪っていく。

「……『あまねく光は遮られる（ルーキフーゲ）』」

空の青を音も無く飲み込んでいく黒雲を睨み、吐き捨てるデイド。おわり
終焉の時は来たれり。別離の時わかれは来たれり。あの暗黒は、その、

合図。

踵を返すデイド。黄金の髪がたなびき、聖法衣をひるがえす。

「さよならなんて言わないわ。コウキ君……………また、いつか逢いましょう」

「うん。またいつか……………」

言葉が終わらぬうちに、呆気なくデイドの姿は消える。僕は再び、たった一人の孤独に戻る。

全ての色彩は喪失し黒く塗り潰される。

青が消えていく。

無慈悲なる暗黒宇宙の色が、青を飲み込んでいく。

無数の優しさが連なってできる、この星の色が消えていく。

広がる闇、これは光の影としての闇でなく、光を飲み込み掻き消す暗黒……………完璧な、闇。

(……………もはや(ネヴァー)……………ない(モア))

聞こえてくる死霊の掠れ声。

背筋に悪寒、身体の末端が凍りつく。

(……………もはや(ネヴァー)……………ない(モア))

闇の奥底から這い寄り、耳元で囁く死霊。

体温が全て奪われる、寒くて、恐ろしくて堪らない。

おまえたちの
(人類の生きる道は……………)

本能的に嫌悪を抱かせる、皺枯れた慟哭。

何も見えない、間近に居るはずのデイドの姿すら見えない、世界の全てから切り離されたような絶対の孤独と恐怖感、視力全てを剥奪されたかのような闇の中……………

……………生首が、闇に浮かび上がる。

蒼白の顔は、長い前髪に目元まで隠れていて表情は分からない。だが、血色薄く紫の病み色やみいろをした口唇が

(…………… もはやない(ネヴァーモア))

ニタリ、と笑みを作っていた。

幻覚と解りながらも、闇に浮かぶ生首と正対する。

「決して(ネヴァー)」

星の死、全ての死、全滅、絶望……頭を振って脳裏に浮かぶ単語を意識外に放り出す。

「絶対に(エヴァー)」

さあ、僕は義務^{じつめ}を果たそう。

右手に刀を、左手に剣を持って残りなくなった空の青を見上げた。

「諦めやしない(サレンダー)」

次の世界の為に。

刀にはまだ光がある。

剣にはまだ光がある。

「いつかまた、この青の空の下で」

全てが闇に閉ざされた星の中で、僕はまだ空の青を見ている。

全てが絶望に閉ざされた星の中で、僕はまだ希望を持っている。

第一章 1（前書き）

第一章

迷子の
気持ち

第一章 1

*

墨で塗り潰したかのような一面の暗黒の中で、意識は浮揚する。

(……ゆ……め……?……)

唐突に、切り換わった視界。唐突に、摩り替わった世界。目覚め前の闇。そこには、先ほどまで感じられなかった現実的な空気の重みがある。

(………夢……だったんだ……さっきの)

覚醒間際のまどろみの中で、正常な思考を発揮しはじめた頭脳は数秒前までの世界を現実から否定する。

(当たり前だよな、世界が滅びる訳なんて……有るはず無いし) 吐き出すのは重い重い安堵の溜息。当然、世界は滅んでなんかないし、自分は消えてなんかない。

それでも、夢の中で音も無く死んでいく世界の姿は背筋が凍りつきそうな恐怖を感じた。

暗黒に飲まれ滅びる世界。

あの地獄の底から湧きでたような黒雲に飲み込まれ、世界から光が急速に失う様は考えるだけで背筋が凍りつきそうになる。

(どうしてだろ……単なる夢、なのに……すごく、悲しい……)

胸に痛み、心に苦み、気持ちは沈みきっている。沈鬱な目覚め。自分でも良く分からない多種多様な感情の糸が絡まりあいこんがらがっている。一番目の感情は喪失感、そして二番目の感情は……何故か、郷愁。

(やだな……ただの夢なのに……なんで、こんなに泣きたくなるんだろう……)

今にも目蓋の奥から溢れ出しそうな涙。自分でも抑えられない感情。

夢だというのに目覚めた途端霞のように掻き消えるような儚く弱いものではなく、このまま一生覚え続けそうな強い印象を持った、夢。

闇に塗り潰される前の、あまりにも綺麗な世界。その美しさが失われる事に本能的な恐怖を感じた所為かもしれない。

遙か遙か先の、世界の果てまで続く空の青色と、その壮大な青の下で出会った黄金・純白・青で構成される神々しいまでの美女。

（どうしてだろうどうしてかな…？一度も見た覚えがない景色なのに…一度も会ったことがない女なの…どこかで、見た気がする）

デジャ・ヴュ
奇妙な、既視感。

あんな草原には行った事がないし、平凡な人生を送ってる僕にはあんな美女の知り合いはいない。少なくとも、自分が覚えている記憶の中に該当する風景も人物も存在しない。あれほどの美しい女性と知り合っているなら忘れられる筈もないのだが。

それでも、夢を思い返す度に、胸の痛みとともに感じる喪失感と郷愁の念は、紛れも無い本物。たかが夢、とは割り切り難い何か不思議なものを感じる。のだが…

（考えても分かんないや…）

結局、考えるのを放棄してまどろみに身を委ねた。

（もう一眠りするかな…もしかしたら、夢の続きが見られるかもしれないし）

本格的な二度寝の態勢をとってむにやむにやともう一度夢の世界へ落ち……

「いつまでのんびり寝てるつもりですか…コウキ君？」

（え！？）

思わず目を開く。夢の中で聞いたのと、全く同じ声で起こされて一人の少女がベッドの傍に立って、僕の顔を覗き込んでいた。

見開いた僕の瞳に、三つの色が飛び込んでくる。

先ず、黄金。

それは豪奢に輝く、癖の無いまっすぐな彼女の髪の色。

次に、純白。

それは絹よりも滑らかで、肌理きめの細かい彼女の肌の色。
そして、青。

僕の好きな空の青と同じく優しい青は彼女の瞳の色。
黄金・純白・青……それは夢で見たのと全く同じ、彼女を構成
する三大色素。

（な………なんで………）

心臓が、止まるかと、思った。

目の前の少女は、まさしく夢の中で見たのと変わらない姿。夢の
中にいるはずの、現実にはいるはずのない少女が、目の前に。

夢で嗅いだのと同じような、甘い香り。まだ、僕は夢を見続けて
いるのだろうか？そんな事を真剣に考えてしまう。

「やっと、目覚めましたか」

動転する僕を、落ち着き払って冷ややかに見下ろす彼女。その言
葉がやや刺々しく聞こえるのは気のせいだろうか。

「おはようございます、コウキ君」

朝の挨拶……にしては爽やかさに欠ける少女の硬い口調。そして、
少女の次の言葉が、僕の混乱に拍車を掛けた。

「
百年振りの目覚めは如何ですか？」

第一章 2

「百年振りの目覚め（、、、、、、、、）は如何ですか？」

(え?)

非現実的すぎる言葉は槌の様に、^{ハンマー}僕の意識を叩き潰した。

『百年振りの目覚め』

その言葉の意味がよく飲み込めない。何を馬鹿なことを…とも思うが、目の前の少女の青い瞳は真剣そのもの。嘘や冗談を言うような表情ではない。

まったく過ぎる少女の瞳から逃げるようにして顔を逸らし、辺りを見回すとUNUMS……『国連大学付属魔法学校』の寮とは全く違う見慣れぬ部屋。きちんと整理された清潔な……病的なまでに白い、清潔すぎる部屋。

(「うーは...どうだ?」)

そう喋ろうとして、口が塞がれていることに始めて気づく。……

人工呼吸器だ。

他にも点滴の管や何だか良く分からない管が身体中に張り巡らされベッドの側の変な機械と繋がっており、思うように動けない。重病人や手術患者でもあるまいし何でこんなものが…

混乱する僕をよそに、少女は淡々と背後に控える二人に命令を出している。

「ゴルヘグ」

「はっ」

少女の傍らに控える、巨大で筋肉質な執事が応答する。

身長は二メートルを越え、筋骨隆々で迫力満点の体軀は百三十キロ以上あるだろう。つるりと磨き上げられた禿頭スキンヘッドに角ばった輪郭の眉まで剃り上げた顔は、道端で出会ったら即効で逃げ出したくなるような極悪な人相をしている。

少女は、大の大人でも裸足で逃げ出しそうな大男に臆する事無く

命令を出す。

「アンヴァリッド、ヤグチ・コウキが無事に目覚めたとハスドルバルの伯父様に報告してきて下さい」

「ははっ」

自分より頭三つ分は小さな少女に慇懃に礼をして、巨体らしからぬ静かな足取りで部屋をでる執事。

「ネル」

「はあい」

同じく少女の傍らに控えた女性が応答する。

榛色の髪を柔らかく編んだ、しっとりとした二十代半ば位の女性
が、黒縁の地味なメガネの下に母性を感じさせる柔らかで優しい
表情を浮かべる。こちらは機能美に優れたメイド服を着込んでいる。
「生命維持装置を外してください。もう、心身・靈魂ともに安定し
ているようですから大丈夫でしょう」

「あいあいさー」

明るく答えると、ネル、と呼ばれた女性は僕に近づいてきた。

「はいはいコウキさん。じっとしてて下さいねー。痛かったら言う
てくださあい」

ネルさんはベッド側の変な機械：おそらく生命維持装置……をいじ
くった後、点滴の針や身体中に張り巡らされた管を看護婦さんのよ
うな手際の良さで次々と外していく。

針を抜くときのチクリとした痛みが、これが紛れも無い現実だと
いうことを示していた。

人工呼吸器も外される。解放された口で自主的に息をして埃っぱ
い空気を吸い込んだ。

「コウキ君、私の話：分かりますか？」

ネルさんとは逆側から、ベッドに横たわる僕に顔を近づける少女。
彼女の体温が伝わるには遠く、彼女の香りが届くくらいには近い距
離。まるで夢を巻き戻したかのような情景。

まるで旧知の間柄のように少女は話しかけてくる。だが、知らない。

僕はこの少女の事を……現実には……知らない。

学校の知り合いではないし、学外にも親戚にも少女に該当する人はもちろんいない。

唯一思い当たるのはさっきの夢の中の女だけ……しかし、夢の住人が現実に現れるなんて、そんな事が現実に起こるのだろうか。夢で見たのと全く同じ少女……いや、良く見れば、違う。その黄金・純白・青の色彩と瓜二つの顔立ちに目を奪われて誤認していたが、その少女は夢の中で見た女とは違っていた。

まず、身長が違う。夢の中の女は僕よりも長身……身長百七十強はあったのに、目の前の少女はいいと二百四十。身長に三十センチ以上の開きがある。

それに伴い、見かけの印象も大分違っている。夢の中の女は満開に咲き誇る女の美貌を完成させていたが、目の前の少女は身体つきも細く華奢で、まだつぼみの固さを残す。

外見だけで年齢を判断するならば、夢の中の女は二十五歳前後で、目の前の少女は僕の妹と同じ年くらいか。

つぶさに見れば顔立ちにも細々とした違いがある。夢の中の女よりも目の前の少女の方がやや眉が太め、目が釣り上がり気味になっていて、強情そうな感じが強化されている。

夢の中の女と同一人物とは思えないが、全くの他人とも呼べない位よく似た少女。一番可能性が高いのは姉妹だろうか？何にしる、この二人が無関係というわけではないと思う。

だから、夢の中では自然に呼んでいた彼女の名前を恐る恐る口にした。

「デイド……？」

「っ！」

少女の反応は顕著に現れた。まず目をまんまるにして驚きを露わにした後、逡巡と躊躇いが交錯し、視線が左右に忙しく動き……最後に、目を伏せて口を開いた。重々しく。

「デイドは……《母》は、もういません」

第一章 3（前書き）

一話分が長すぎて読みづらいとおしかりがあったので、小分けして再アップしてみました。

第一章 3

「デイドは……母は、もういません」

強張った顔、硬く緊張した声。純白の顔に、血の気は薄い。

「あなたのパートナーであったデイド・バルカは……既に、死んでいます」

「……死んだ……？」

夢の中の女の名前が現実に通じる事も驚きだが、その人が既に死んでいる、と言われるとは思っても寄らなかった。しかし続く言葉もまた衝撃的である。

「自己紹介が遅れました。私はエリーシャ・バルカ。デイド・バルカの……一応、娘ということになります」

「……むすめ？」

姉妹ではなく、母娘だったとは……驚き、鸚鵡返しに聞き返すだけの僕を、笑顔から一転して固い表情に戻った少女……エリーシャは射抜くように強い視線で見詰めて来る。

「これからは、母に代わり私がコウキ君のパートナーを務めさせていただきます」

姿勢を正して、エリーシャは僕に真剣な眼差しを送る。

「母デイドではなく、未熟な私などがパートナーでは貴方にとって不服であるとは思いますが……了承して頂きたい」

自分の力不足を恥じる様な申し訳なげな、エリーシャの真摯な表情。その顔を見て、僕の視界がぐらりと揺らぐ。この少女が、夢の中の女の娘だ（ひと）というのなら……あの夢は……夢だと思っていたモノは……！

「ゆ……め……じゃ、ない……？」

身体が震える。寒い、暗い、あの夢を、思い、だして……頭を抱えて、呻く。

暗黒に飲まれ滅びる世界。

身の毛のよだつ悪夢、あの底冷えのする喪失感、あれは悪夢だと、現実ではない悪夢だと、安堵していたあの光景が……現実だったら？

「ほんとに……ほんとに……世界が、滅び……て……？」

血が凍る息が止まる心臓が停止しそうになる。

「コウキ君……？」

「コウキ様……？」

両サイドから不安げな声。

「空が……空が……！くろ、く……塗り潰さ、れて……」

優しく尊い空の青色を不吉で不気味な黒一色に塗り潰す悪夢が現実のものとしたら？

「嘘だ！嘘だと言つてよ！僕は……まだ、夢を見ているんだ！」

僕の言葉は呻きから発狂寸前の叫びへと変わり……

パシィイイン、と高い音と衝撃で顔が弾かれた。

「落ち着きなさい」

ビリビリと痛みを訴える右頬……エリーシャの平手打ちだった。

「殿方が取り乱すなんて、みつともないですよ」

出来の悪い生徒を叱る厳格な女教師のような瞳でエリーシャに見据えられる。

「……ごめんなさい」

肩を竦めて僕は小さくなる。エリーシャに叩かれたショックが、強制的に思考を停止させてくれた。

「……目覚めたばかりで混乱しているようですね」

エリーシャの瞳から厳しさが消え、先ほど僕を引っぱっていた左手で今度は僕の頬を優しくさすってくれた。それだけで、不思議なほど簡単に痛みが引いていく。

「叩いたりして申し訳ありません。しかし一体どうしたのですか？急に取り乱したりなどして……」

こちらを案じるエリーシャの瞳。その色、夢で見た空と同じ青色。「夢……を見たんだ。世界が、滅びる夢を」

僕は訥々と喋り始めた。

「世界の終焉^{おわり}を告げる鐘の音とともに……空いっぱい広がる優しい青が……黒に塗り潰されて……全てが消えていく……夢を」
他人に話せば、そんなものは只の夢だよ、気にする必要なんてないよと言ってくれるかもしれない、そう思っ

「は、はは……可笑しいよね、こどもじゃあるまいし、ちよっと怖い夢を見ただけでこんなに取り乱すなんて……ほんと、みつもない」

自分から笑う。乾いて力のない笑いを無理矢理浮かべる。

そう、笑って欲しかった。馬鹿なことを言わないで下さい、と。世界が滅びるはずなんてないんだから、と笑い飛ばして安心させて欲しかった。しかし、

「……………」

エリーシャもネルさんも等しく目を伏せる。沈黙は、重い。その沈黙が、既に答えを表していた。

「コウキ君、それは間違いなくあなたが実際に見た景色です」

ややあつて、エリーシャが口を開いた。

「『私の中の母の記憶』が、あなたの見た夢の風景と一致しています」

胸の真ん中に手を当てて語る言葉は、僕の理解を越えていた。

「今から百年前、ウトナピシュテム発動直前のこと。母デイドとあなたが会った最後の時……そう、モンゴルの草原で過ごした『世界最後の一時間』の光景です」

瞳を閉じて語るエリーシャの言葉は……信じられないものだった。

『この空の青の下で、また、いつか必ず再会しましょう』

第一章 4

「!？」

夢の中の女が言ったのと寸分違わぬ言葉が、僕の夢の中だけに存在するはずの言葉が、目の前の少女の口唇から発せられた。

「約束は……叶えられませんでしたね」

顔を伏せて、口元だけで笑うエリーシャ。

「そんな……」

エリーシャの言葉は、僕の夢を現実だと証明していく。僕はもう、力なく頂垂れるしかなかった。

エリーシャが再び僕を見据える。

「話すより、実際に目にする方が早いでしょう」

「う……わ」

温かい手が女の子とは思えない強い力で僕の腕を取り、拒絶する暇も無くエリーシャの手で起こされる。

「今、この世界の残酷な現実を」

冷たい言葉を耳にしながら、部屋の窓の方に連れて行かれる。エリーシャが部屋の窓を開けて、上空を指差す。

嫌な予感。見たくない。しかし、エリーシャの無言の圧力が見ることを強制した。部屋の窓から外を見る。指し示された上空を。

「……………え？」

そこに空は無かった。あるのは金属製の……天井だけ。無機質な、灰色の、天井だけ。

「この人工アレキサンドライトの天窓から見るができます」
血が全身から引いていく。目は天井の一点に釘付けになる。

「あなたの目で、しっかりと見てください……現実を」

天窓、ああそれは確かに天窓だった。金属の天井の一角に開いた穴は、この地下の外の姿を見せていた。

「『あまねく光は遮られる（ルーキフーゲ）』によって、一切の光

を失った、あの星の姿（、、、）を」

天窓の外は……暗黒だった。夜の闇じゃない、そんな甘いものじゃないあの暗黒は……一切の生命の存在を拒絶する残酷な宇宙の色そのものだ。

「あ……？あ……あ……！？」

足が萎えて床に膝を着く。宇宙の先に在るモノに気づいてしまったから。

アレキサンドライトの天窓に浮かぶのは黒く澱んだ星。

その星は宇宙の暗黒すら飲み込むクラサ、野晒^{しゃれ}髑^{むく}髒^づの落ち窪んだ眼窩の様なクラサ、カビつき腐り果てた果実の様なクラサ、

あの星で最も有り触れていて、そして最も優しい色が広がっているはずなのに、どこにも見えやしない。

「ちきゅ…う…？あんな…黒く…濁りきったものが…地球…？」

俯きうな垂れ呻く。信じられなかった、信じたくなかった、この目が間違っているのだと思いたかった。

「その通り、コウキ君」

しかし、非情にもエリーシャの声がそれを認めさせる。認めさせられてしまう。

「地球は滅びたのです。百年前に」

空の青色を一切失った天体を、生命の源たる光を拒絶する星を、^{エアース・ブル}頭上に見上げる。其処は一切の生命の息吹を感じ取れない死の星にしか見えなかった。

暗転する視界の中で、ココハドコデスカ、と最後に尋ねた。

「此処は月」

答えはすぐに返ってきた。

「……家を失くしたこともたちの、最後の避難所^{アズイル}です」
その言葉を最後に、僕は再び意識を失った。

第一章 5

……地球が滅び、自分達が月に居ることを聞いた僕はショックで倒れ、再びベッドに身を横たえていた。

あたりには気まずい沈黙。ネルさんもエリーシャも何も話さない。僕が拒絶するから、だ。

世界の終焉、百年の経過、月に居ること……目で見たことを理解できず、耳で聞いた事を納得できない。僕はネルさんが食事を用意してもエリーシャが何か話しかけても徹底的に無視をした。一つでも反応したら、この状況を現実だと認めてしまうと思つて。

……ゆめ。そう、これは夢、こんな受け入れ難く、常識から乖離している事が現実にかかる筈が無い。

今の気持ちは、見知らぬ土地で迷子になった時の気分に近い。一人では歩くのもおぼつかない幼児期に親とはぐれ、心細さのあまり途方に暮れている時のように。

そんな僕にネルさんは困った笑顔を浮かべ、エリーシャは無言のまま仏頂面で僕を見下ろしていた。

ドアが開いたのはそんな時。

「お久しぶりだのお、コウキ」

さきほどのゴルヘグという巨大な執事とともに、一人の老紳士が部屋に入ってくる。

「コウキと違って僕は随分と年老いてしまった。髪はすべて白髪になってしまったし、老眼鏡を使い分けないと満足にものを見ることもできない」

老紳士は気さくに話しかけてくる。まるで旧知の友に会ったように。しかし僕には、この老紳士の顔に覚えはない。

「だ……れ……？」

顔は深く刻まれた年輪に皺枯れ、巨大な執事の側にあつてやや腰の曲がった老体は随分とみすばらしく見えてしまう。

「外見があまりにも変わってしまった所為で分からんか……まあ、無理もないかの」

老紳士は苦笑しつつ、

「しかし、こうすればお分かり頂けるかな？」

「それは！？」

手にした杖を掲げた。嫌というほど見覚えのある、杖を。

そして言葉を紡ぐ、魔力ある、言葉を。

『アンフォルメル 定形無き美術 ！』

呪文とともに老紳士の姿が一瞬にして崩れ、再構築し

「やあー、コウちゃん百年ぶりー」

若々しい、肌も瑞々しい少年へと変わる。

「ハ……ハッド……？」

ぎゅーっ と僕を抱き締める少年に信じられない思いで、僕は目を見張った。なぜなら、それは僕が良く知った人だったから。

「ハッド……かあ。そう呼ばれるのも随分久しぶりだね」

遠い日に思いを馳せるように目を細めながら、少年は微笑を浮かべる。

「本当に、そう呼ばれるのは百年ぶり……だね」

『ハッド』……ハスドルバル・バルカ。

MSUNUで僕と机を並べて学びあう学友、ルームメイトにして一番の親友にして悪友で、渾名でお互いを呼び合う仲だ。

学年トップの優等生で、特に変化形の魔術に優れる。先ほどの『アンフォルメル 定形無き美術』も学校の課題として自作したものでありながら、変

化魔法の触媒として世界最高位の性能を示し、世界中を驚かせた。

僕と同年でありながら既に世界トップクラスの魔術士として認められていた。

そんな天才肌に似合わず気さくな……というよりお茶目な性格で、男女問わずの人気者。

まさか、さっきの老紳士がハスドルバルだったとは……

「コウちゃんにとっては何だったの一眠りだったただろうけど……百年

は、本当に長かった。

魔術で老化をだいぶ遅らせている僕でも、あんなに年老いてしま
うほど……百年という時間は本当に長かった」

生きる事に疲れきった老人の倦んだ瞳に、その長い年月の労苦が
垣間見られる。

「もう、地球の……あの星からの生き残りは僕だけになっちゃっ
たよ……悲しいねえ」

一人残された老人の寂しげな笑顔。

「ハッ………ド」

震える声で長い時間を生きてきた友に問う。

「本当に……本当に百年が……経ったの……？」

ハスドルバルに縋りつくような思いで尋ねる。積み重ねられる奇
怪な（おかしな）現実の中で、なんとか自己を確立しようとして。

「百年も経ってるなんて……世界が滅んだなんて、此処が月だなんて
……信じ、られ……ない」

「復活したばかりで少し混乱しているようです……母が亡くなって
いることと此処が月だという事を知って、とても混乱しています」

エリーシャがハスドルバルに耳打ちする。

「コウちゃん、確かに姉さんが死んだ事でショックを受ける気持ち
は分かるけど………」

慰めるようにハスドルバルが声を掛ける。しかし

「そもそも『デイド』って………誰？」

絶句。

そうとしか言いようの無い表情に、全員が固まっている。

第一章 6

「そもそも『デイド』って……誰？」

絶句。

そうとしか言いようの無い表情に、全員が固まっている。

「……なん、ですって……？」

ややあつて口を開いたエリーシャの声は乾いていた。信じられない、という思いでいっぱいになった表情で。

今はもう亡く、目の前の少女の母であり、僕のパートナーであつたという夢の中の女。^{ひと}僕が知ることを当然として口の端にのぼるその人の名前。

「母の事を…知らないと言つのですか…？」

エリーシャの顔は、呆然から次第に変わっていき、

「あなたのパートナーですよ？それを知らないと言つのですかコウキは！」

しかし、僕にはその人物の事すら分からないのだ。

「知らない、知らないんだ……僕はその人の事を……本当に、知らない……」

激しい調子で詰め寄るエリーシャに僕はうろたえる。

「で、ですが、先ほどはコウキ君から母の名を口にしたではありませんか！」

「分からないんだ、その人の事。夢の中で見ただけで……」

「そんな……それでは母があまりにも……！」

激昂寸前のエリーシャを、ハスドルバルが止めた。

「エリーシャ、少し下がっていなさい」

「でも、コウキ君は私の！」

「いいから、ここは私に任せなさい」

「はい、お爺さま」

不承不承、エリーシャは下がる。怒りに震えるエリーシャの代わりに、ハスドルバルが質問してくる。

「コウちゃん、本当に君はデイドの事を知らないの？」

僕は無言で頷く。頷く以外に何も出来ない。

「デイド・バルカ　　僕の姉のデイドの事。コウちゃんをアンヴァリッドにして、絶滅戦争で共にミゼリコルディアの脅威から人々を護り続けた『神仙女王』、そう言っても分からないかい？」

「あんばりつど……………？みぜ……………こる？」

連発される知らない単語に、首を傾げる。僕の様子を不審気に見ていたエリーシャは、やがて何かに思い至ったらしく、恐る恐る口を開いた。

「まさか……………コウキ君、記憶が……………？」

第一章 7

それから三十分ほど掛けて、カウンセリングみたいに根掘り葉掘りじつくりと、僕への事情聴取が行われた。

「部分的な記憶喪失、ですね」

生い立ちから家族構成、僕の記憶がどこまで保たれているのかじつくりと検証される。

普通の公立小学校からUNUMSの中等部に入学。そのままエスカレーター式に高等部へ。そして、高等部の二年生に。僕の昨夜(?)までの記憶に問題は無かった。

「残った記憶は十七歳、UNUMSの二年時まで。まだデイドと逢う前の記憶で止まっている……………」

問題があるのはその先だった。記憶が無いことが分かった時点で、話の流れは過去の出来事の説明に変わり、十八歳から二四歳まで、僕の知らない、僕の記録を聞かされる。

件のデイド・バルカとの出会いは高等部三年生の時。

UNUMSに教師として赴任してきたデイドが、弟ハスドルバルのところ遊びに来たときに紹介されたとのことだが……………」

「あれはまさに電撃的だった……………」

当时を思い出し、ハスドルバルが笑う。

「僕の姉を初めて見た時のコウちゃんデイドの反応といたら……………うっふっふ」

ハスドルバルの含み笑い。う……………この笑顔は……………嫌な予感。

「目を見た瞬間に固まって、耳まで真っ赤になって、酸素不足の金魚みたいに口をパクパクしちゃってさあ　　いやいや、人が一

目惚れする貴重な瞬間というものを間近で見ることができたよー」

「あらあらそれは初々しいですねー」

「初恋つてすごいねー、一目ぼれって可愛いねー、それを端から見ているのはホントに楽しかったねー」

「ほほう、それはそれはからかい甲斐があるってもんですねー」

「……………っ あうあう」

「用もないのに職員室にいつてー」

「けど姉さんに話しかけられずに遠くから見てるだけー」

「まごつく間に他の先生から雑用押し付けられる毎日」

「あらあらまあー」

「は……………はつど？……………あうあう」

ハッドが歌うように赤裸々に僕の恥を暴露し、メガネを輝かせて他人の恋話を聞入るメイドのネルさん。

ゴルヘグさんは相変わらずの無表情。

エリーシャは……………あ、目蓋を落としてソッポ向いてる。

（ナンデスカ、コノ桃色空気ハ……………？）

自分の記憶に無いのに、自分の恋話がこんなに恥ずかしいとはいやまあ確かにデイドさんは綺麗だし、夢の中で一目見ただけに心に焼き付いて離れやしないし、有り体にいつて完璧に僕の好みのだ真ん中ではあるんだけど……………実際会った事もない人だからなんとも言えない。

悩んでいる間に悪友っぷりを存分に発揮するハスドルバルの言葉は更に続き、

「んで、バレンタインにねー、なんとコウちゃんが手作りの……………」

「お爺様」

冷たい、冷たい瞳と声で、エリーシャが遮られた。

「その記憶は私にとつても大事なものです。たとえお爺様であつても……………笑われるのは許せない」

思わず背筋がゾクゾクするほどに、冷たい瞳で、エリーシャはハスドルバルを止める。

「それよりも、コウキ君へ説明を始めましょう。コウキ君に、現状認識してもらう為に」

叱られたハスドルバルはややバツが悪そうに苦笑し……………最後に、しみじみとハスドルバルが呟く。

「楽しい日々だったねえ…あの頃はさ」

しかし、楽しい日々は長くは続かなかった。

「**絶滅戦争**」

そう、全ての終焉^{おわり}はこの戦いから始まった。

第一章 8

「**絶滅戦争**」

そう、全ての終焉はこの戦いから始まった。

人類の……いや、地球上の全生命の根絶の為に放たれた『刺客』が世界に現れた。

『刺客』は開戦から一年で全生命体の六割を抹殺。たったの一年の内に五十億以上もの人命が灰燼と帰した。

特に人口の集中する都市部が真っ先に破壊された。通常兵器の一切通用しない『刺客』を相手に各国軍は成す術もなく世界各国は滅んでしまった。

部屋モニターにその様子が映し出される。ニュー・ヨークを血の海にし、オーストラリアを腐らせ、東南アジアを地図から消し、カナダを酸の雨で溶かし、インドの半分を貪り食い、アルゼンチンを業火で焼き尽くし、大西洋を干上がらせ、シリアを氷結し、日本の東半分を海に沈めてゆく『刺客』達。地球上の如何なる生き物の存在も許さないと言わんばかりにそれは鳥を獣を虫を魚を人を花を木を草を殺し、屠殺し、ただ虐殺し続けた。

ミゼリコルディア、曰く『神の慈悲』、『息の根を止める短剣』……

……それが、世界の『刺客』の自称だった。姿形は人間と酷似しているが、その戦闘力は一体一体が神話級の災厄クラス。たった一六九体のミゼリコルディアの出現に数十億年の時間を掛けて進化してきた地球上の全生命体に『絶滅』という二文字が突きつけられた。

「しかし、人類は無力ではなかった」

開戦から一年、バルカ家当主ハミルカル・バルカ（ハスドルバルやデイドの父）は世界の神秘魔術呪術仙術を駆使して、ミゼリコルディアに対抗できる存在を創造した。

「それが、アンヴァリッド」

アンヴァリッド……異空間《アンヴァリッド廃兵院》に本体を『埋葬』する事によ

り、『呪力』という力を一億人分用意する事と、いくつかの条件さえパスすれば何度でも分身を復活できる人類最後の切り札。ジョーカー

アンヴァリッドの創造によりミゼリコルディアと比肩しうる戦力を手に入れたハミルカルは各国の残存勢力を統合し、壊滅していた国連軍を再編、ミゼリコルディアとの戦いの最前線に身を置いた。

それから更に一年後、戦争二年目

「僕が………？」

「そう、コウキ君はアンヴァリッドになったのです」

「本体が埋葬されて？じゃあ、今の、この僕は……？」

「《廃兵院》アンヴァリッドに埋葬されている本体の分身、ということになります」
エリーシャの瞳は、真剣だった。嘘、偽りは全くないまっすぐな瞳に見据えられる。

「僕が……この、僕が……分身………？」

『剣聖』ヤグチ・コウキ。それが一九歳になった僕に、人々が付けた尊称だった。

神呪天討流という四剣四刀よっぴんの殺神剣技を駆使するアンヴァリッド、初陣でミゼリコルディアに勝利して以来三十四連勝。不敗にして常勝必殺の僕には人類最強の肩書きが付けられた。

「僕が………人類最強？」

クラスのイジメっ子に泣かされまくっていた、この僕が？と、訝る間にも話は進む。

「『剣聖』ヤグチ・コウキと『神仙女王』デイド・バルカの活躍により、敗北だけだった国連軍も序々に勢力を巻き返してきました」

三年目には両者の勢力は拮抗し……四年目、五年目では人類側の方が優勢になっていた。

「このまま、勝利は人類側のものになるかと思われました。が……」

コンスタンティノープル最終決戦。

ミゼリコルディア、アンヴァリッドの総力を掛けた最後の決戦は……人類の敗北で幕を閉じた。国連軍は瓦解、最高指揮官ハミルカル戦死、主だったアンヴァリッドの消滅、人類はほぼ全ての戦力を失

い、抵抗をやめた。

「そして、地球はミゼリコルディアの手に落ちました」

決戦を生き残った残り十三体のミゼリコルディアは地球を自分達の都合よい姿に変え始めた。その一つが『あまねく光は遮られる（ルーキフーゲ）』。太陽光を嫌うミゼリコルディアが地球に陽光が届かないように分厚い黒雲で覆い、地球から一切の光が失われはじめた。

「生き残った僅かな人類は、もはや地球での生存を諦めました」

地球外への脱出。開戦初期から続けられていたこの計画の指揮をとっていたのがハスドルバルだった。ウトナヒシステム箱舟計画と呼ばれる計画は決戦敗北から一月後には強行される。

不可避となった世界の終焉を前に、巨大な箱舟に一億人を乗せての月移住計画。

箱舟は十の階層に分かれており、一つの階毎に、東京山手線と同じ位の面積に一千万人近くを詰め込む。

どんなにコストダウンしたといっても、月に人間一人を送るのにすら千万円は掛かる。ましてや一億人なんぞ言語道断。実行不可能かと思われたが……

「地球から月まで約三十万キロ。それだけの距離を、これほどの大質量を移送させる手段は……ただ一つしかありません」

物体を加速させる能力 ウトナヒシステム『剣聖』ヤグチ・コウキのその能力だけが箱舟計画を可能にした。とはいえ、第二宇宙速度（地球の重力を振りきり、月に到達する為に必要な速度）まで巨大な箱舟を加速させるのは、流石の『剣聖』といえども全力が必要だった。

全力を使い果たす……それは、アンヴァリッドにとって自らの消滅を意味していた。

「コウキ君の見た先ほどの夢とは……この直前の記憶だったのでしょうか」

エリーシャの瞳が愁いを帯びる。

地球が完全に『あまねく光は遮られる（ルーキフーゲ）』に覆わ

れる直前、まだ青空を残していたモンゴルの草原で、消滅を覚悟した僕と、箱舟で月へ行くデイドは最後の時を過ごした。

そして、箱舟計画^{ウトナビシユテム}発動。ヤグチ・コウキは箱舟を月まで飛ばして

……消滅した。

第一章 9

「これが、あなたの記録です」

バルカ家に保存されていた映像資料とともに説明された僕の記録。自分の記憶にない自分の勇姿は……はつきり言っただけ他人にしか思えない。

「信じ、られない……」

だから、自然とそんな言葉が漏れて出た。

「僕は只の学生で……『剣聖』だとか、アンヴァリッドとか……そんなのは知らない……」

僕にそんな力がある事も、僕がそんな戦いを経験した事も、信じられない。

「どんなに信じられなくとも……間違いなく、あなたは月の民一億の呪力をその身体に宿した人類最強のアンヴァリッド、『剣聖』ヤグチ・コウキなのです」

「そうでなければ……もう、人類には滅びの道しか残されていません……」

エリーシャは強い眼差しで、ネルさんは縋るような眼差しで僕を見る。

一端、会話が途切れる。僕の理解が追いつくのを待とうというのか、誰も声を掛けはしない。ただ、見守られていた。

「僕の……」

ややあつて、口にしたのは、一つの疑問。

「僕の家族は……どうなったの？」

聞くのが怖い、だが、聞かねばならない。

「……御両親は戦禍に、巻き込まれて……残念ながら……」

エリーシャが俯き……それだけで答えは想像できてしまう。

そうか、お父さんもお母さんも……みんな、死んじゃったのか

……仕方ないよね。あんな凄い戦争があつたんだから……

「ですが、妹のアカリさんは絶滅戦争を生き残り、このウトナピシユテムへ避難していました」

「アカリが！？」

信じられない思いで、勢い良く顔を跳ね上げる。アカリ、僕の歳の離れた可愛い妹。そのアカリが……生きてる！？

しかし、喜びはすぐに掻き消される。

「すでに五十年近く前に亡くなっておられますが」

「そう……か。もう百年も経ってるなら……生きてるはずないよね」

エリーシャの申し訳なさそうな声に、僕も再び落胆する。

「写真なら、幾つか」

「見せて」

「どうぞ、こちらに。アカリ様の親族から借りてきたアルバムになります」

ネルさんの手からひったくるようにして、写真を見る。

僕の記憶にあるのは、幼い頃はいつも僕のシャツを引っ張りながら後ろをちょこちょこついてきていた、甘えん坊の妹。

「これが、アカリ？」

だが、写真に写っているのは、僕の見知らぬ妹の成長した姿。僕の見知らぬ顔をしている妹の姿。僕より遥かに大人っぽくなった、妹の姿。

「アンヴァリッドの血縁者からは、優先的にウトナピシユテムへの乗船が行われました」

写真はウトナピシユテムに乗ってからの、アカリの生涯を記録していた。

「なんで、アカリが、赤ちゃん、抱いてるの？」

思わず、目を丸くした。写真には優しい顔で胸に抱いた赤ん坊をあやすアカリの姿。

「それは……もちろんアカリさんが出産されたからです」

「えーっと……相手は？」

「それは不明」

ハスドルバルが即座に切り返す。

「不明……？どうして？」

「彼女が、相手は誰か語らなかつたから。未だにヤグチ・アカリの相手は誰だったのかと論争になっているよ」

「……つまりは、アカリ様は未婚の母シングル・マザーとなられたのです」

重々しく、巨漢の執事が言葉を続ける。

「アカリが……未婚の母に……」

お兄ちゃんとしてはものすごく釈然としないものを感じながら……アルバムを捲る。

息子が出来て、娘が出来て、お嫁さんが来て、お嫁に行つて、孫が出来て、家が分かれて、誰かが死んで、また誰かが生まれて……

「血縁者からは力ある子孫が生まれる可能性が高いため……次代ノバジェラサオンの戦力として期待できる子が生まれるから、優先されました」

年経るごとに家族が増える。増える、増える。時々減つて、また増える。

「今、この要塞……騎士の城クラック・デ・シュバリエに集う騎士団もそんなアンヴァリツドの子孫たちで構成されています」

あつというまに六十歳の誕生日。還暦祝いに集った親族一同。

姻族には白人もいれば黒人もいる。だから子孫の顔は多種多様、僕やアカリに良く似た子もいれば、日本人の面影なんて全く無い子もいる。

世代、年代、時代を超えて集まった人々……人類の縮図のような、一つの家族。

その真ん中で、最も幼い赤ちゃんを抱いて微笑むアカリ　　な
んて、幸せそうに。

「アカリ……」

六十年。僕の知らない半世紀を生き抜いた妹。

すっかり年老いた、でもどこかに幼い頃の面影を残した、僕より

遙か年上になった妹。

がんばったね、たいへんだったよね……そんな想いを込めながら、写真の妹の頭に指を這わせる。昔、幼い妹の頭を良く撫でてやっていた時のように……感傷を込めて。

第一章 10

「一週間後」

ゴルヘグが、厳かに口を開いた。

「月の永久影に眠るミゼリコルディアの封印が解けます　その名は『腐敗王』ガモンハイド。百年前、箱舟計画で逃げる人類を絶滅させる為に追ってきたミゼリコルディアです」

「月の『地球化』直後で消耗していた母デイドにはガモンハイドを倒す力は無く…封印を掛けて相討ちに持ち込むのが精一杯でした」

エリーシャが言葉を続ける。

「『地球化』？つてなに？」

「言葉どおりの意味です。星の環境を地球と同一に強制変換する究極魔法　この時母デイドが行ったのは『重力の地球化』。本来地球の六分の一しかなかった月の重力は、母デイドの『重力の地球化』より、一Gを保っております」

「そんなすごいこと、出来るんだ」

途方もないスケールの魔法に、ただただ感心する。

確かに、重力に地球との違いは感じられない。その所為で、ここが月だと到底信じられなかったわけだが……。

「封印解除後、『腐敗王』ガモンハイドに聖戦で必ず勝利する事。それが今回の復活でコウキ君の果たすべき使命です」

「聖戦に勝利さえすれば、再び『地球化』を行う事ができるようになるんだ、コウちゃん。そうすれば、月の今の閉塞した状況を解決出来る」

エリーシャが、そしてハスドルバルが、真摯な瞳で僕を見つめる。

「アマギデイオン……………聖戦……………」

アマギデイオン

第一章 11

「アマギディオーン……………アマギディオーン聖戦……………」

僕は何度も、何度も、その言葉を呟く。

「僕が……………こんな、化け物と？」

先ほどの光景を恐怖と共に思い出す。超常の力を持って全ての生命を殺戮するミゼリコルディア、たった一人でも数億の生命を殺せる『刺客』を。

「む、無理だよ！無茶だよ！ば、僕がこんな化け物に勝てる筈ないじゃないか！？」

「コウキ君が敗北すれば、最早誰もガモンハイドに太刀打ちできる存在はいなくなります。そして、戦力を失った月の世界は…再び地球と同じように滅ばされるでしょう」

淡々とした口調のエリーシャ。それは逆に暗い未来を想起させる。

「コウキ君だけが、最後の希望なんです」

「そんなこと……………言われ、ても。僕にはそんな力なんて微塵もないよ！」

「力はあるんです、間違いなく。記憶喪失の所為で、その使い方を思い出せないだけ」

なおも洩る僕に、エリーシャのキツイ視線が返される。

「ならば、身体で思い出させてあげます」

髪を掻き揚げて、片手を伸ばす。

「シュベルトライテ！」

号令一下、光と共にエリーシャの右手に大きな槍が出現し、構えた 僕に向けて。

巨大な、エリーシャの身長より大きい槍。魔法を学んでいないものでも肌で気づくだろう、この槍の巨大な魔力が、大砲やミサイルよりも危険な神威兵器だということを。

「否が応でも、無理矢理にでも思い出させてあげます。あなたの力を」

白銀に輝く鋭い槍の穂先が、僕に……僕の心臓に向けられる。その目には本物の殺気。

「本気で死線をくぐれば、力も発揮されるに違いありません」

「お、お嬢様？あんまり手荒なことはあゝお止しに〜」

エリーシャの後ろでおろおろするネルさんは止めようとするが、今のコウちゃんの状態を知るにはそうするのが一番だろうね……

…やる価値はあるよ」

「は、はっど……？」

ハスドルバルが、笑って凶行を促す。

許可を得たエリーシャは口元に笑みを浮かべて腰を落とした。

「避けるか、止めるか、弾くか　さもなくば死か」

「エリー………シャ？」

身が竦む、身が凍る、身が縮む。

「大丈夫ですよ、コウキ君の技なら私程度の突き、軽々と避けられるはずですから」

ニコリとした笑みは却って恐怖心を増した。

「それに、万が一避けられなかったとしても、アンヴァリッドならすぐに再生しますから、心配はいりません」

恐怖で固まり、逃げる事も出来ない僕はただジタバタと意味の無い行動をとる。

「殿方が取り乱すなんて、みつともないですよ」

ダメだ、動けない、みつともなく声を上げ、助けを乞おうとして

……
「ハッド……誰か………誰か、助け……！」

衝撃が胸を貫き、僕の意識は闇に落ちた。

第一章 12

最早何度目になるのか、目覚めた時には同じ天井。

「あれ？」

「お気づきになりましたか？」

執事のゴルヘグが上体を起こした僕に気づき、声を掛ける。

「なんで、ぼく……？」

エリーシャの槍に刺された筈なのに……ピンピンしている。絶対死んだと思ったのに。

「痛……」

と、胸の真ん中に焼け付く様な痛み。しかし、もちろん風穴なんて開いていない。痛みからすると痣くらいは出来てそうだが、気絶するほどの重症とはほど遠いものだ。

「一応、手加減はしてくれたんだね」

本当に刺し殺されるかと思っていただけに、ほっと一息について、傍らに立つエリーシャに笑い掛ける。

「……コウ、キ……くん」

しかしエリーシャの顔は蒼白。まるで亡霊でもみたかのように僕を見ている。

硬直しているエリーシャを代弁するかのよう、ゴルヘグが口を開く。

「いいえ、エリーシャ様は何一つ手加減などしておられませぬ。あの瞬間、コウキ様は確実に絶命しておられました」

「……………え？」

「エリーシャ様のシュベルトライトに胸を貫かれ、即ショック死。しかし流石はアンヴァリッドと申すべきでしょうか。心臓を完全に貫かれながらも再生するまでに僅か三十秒。伝説級に力のある不死者でもここまで速やかな再生はなかなかできぬというのに」

「な、何をいつて……………」

ゴルヘグの言葉の意味を理解できず呻く僕の手が、ジユクジユクとした液体に浸る。

「……………え？」

手が、血に浸っていた。

ベッドは大量の血を吸っていた。

まだ固まっていない赤い血が、部屋中を赤く汚していた。
その血は誰のものか？

考えずとも、気づいてしまう。

胸の真ん中に痛み……………傷なんて無いのに。

ただど血に汚れた服が、部屋が、証明していた。

「……………コウキくん、そんな……………わたし、避け……………られると、思ってた……………のに」

信じられないと、力ない目で僕を見るエリーシャ。その手に握られた白銀の槍シユヘルトライテには……………緋い液体。

僕はエリーシャの槍に貫かれ、即死し……………そして、即『再生』した。

やや後方で、ハスドルバルが立ち尽くしていた。

「君が、本当に能力まで喪失しているとは……………な」
血の飛沫で顔を汚したまま。

「自己再生能力は往時のまま。しかし……………」

それは、死刑判決を受けたような、絶望の顔だった。

「復活したヤグチ・コウキに『剣聖』としての戦闘力は皆無……………か」

ハスドルバルは沈黙する、深い絶望に沈み。少年の姿のまま、老人の翳を滲ませて。

第一章 13

「ハスドルバル翁、つまり我々は……失敗したということか」
議長の口調は重々しく

「一億人分の咒力と、三百億メレムもの血税と、八十万ギガワットの発電所を注ぎ込み消費した、救世主ヤグチ・コウキの復活に……」
苦々しく

「失敗したと　　そう言うのか!!」

満場は沈黙する、深い絶望に沈みこんで。

騎士の城の円卓会議場に集まった騎士団員は苦悩し、懊悩し

皆一様に力無い目で、全ての希望を失ったような虚ろな瞳で、僕を見た。

なじるような瞳でねめつけられる度に胸の傷が痛む。

寝巻きから礼服に着替えた僕は立ったまま、彼らの非難の矢面に立つ。気分はまるで裁判の被告人、身に覚えのない罪状で捕らえられた。

「然り」

絶望の報告を行った統合騎士団長代行ハスドルバルは無表情で切り返す。

「復活は不完全だった……ヤグチ・コウキの受肉は成功し、現世に黄泉返ったが（、）」

ハスドルバルの変化魔法は解かれている。老紳士の姿に戻っている。「されども、肝心の絶滅戦争の記憶が欠落している」

御歳一二〇歳を越えるハスドルバルだが、背筋は伸び口調は明瞭で声量は十分。しかれども、その言葉の力強さが場の空気を好転させはしない。更なる重圧のみを老紳士は発言する。

「凄惨な戦争の記憶に対し自ら記憶を封印したのか、それともなにか外的な要因によって記憶が障害されているのか、百年という時間の経過が『廃兵院』システムに障害を起こしたのか……原因は不

明だが」

溜め息が漏れる。議員の中には両手で顔を覆うものもいた。

「現在の彼は十七歳当時……絶滅戦争勃発二年前までの記憶しかない。彼がただの学生として平和な日常を過ごしていた時までのことだ」

ハスドルバルが言葉を発する度に、その一語一語が絞首台の縄のように締め付けてきて息が苦しくなる。

「知識も肉体強度も戦闘力も、その当時に準じたものとなっている。つまり、アンヴァリッド廃兵院に『埋葬』される前の……ごく一般人と変わらぬ力しかない」

そして死刑判決を断じる裁判長のように、ハスドルバルは発言をこう締め括った。

「復活したヤグチ・コウキは……無力だ」

信じていたものに裏切られたように、生気の無い幾つもの瞳が僕を胡乱に見下げる。

「このままでは、アマギディオン ミゼリコルディア聖戦にて刺客に敗北するは必定。月に残った人類も絶滅（、）することになる」

死刑判決……そう、死の宣告を受けたように満場は沈黙している。深い絶望に沈みこんで。

「どうするのだ！？ミゼリコルディア・ガモンハイドの侵攻は間近なのだぞ！？」

誰かが激昂して机を叩いた。それを契機に各騎士達は火が付いたように叫びはじめる。

「騎士を総動員したらなんとかならんか？一万もの騎士シュバリエならば、ミゼリコルディアにも立ち向かえよう」

「アンヴァリッドの劣化コピー体である騎士ではミゼリコルディアに敵うはずも無い。息をするより容易く殺されるのが必定であり……」

……ガモンハイドの空腹を満たす餌と成り果てるだけだ」

「新たに他のアンヴァリッドを復活させる事はできないのか？」

「不可能だ。単純に咒力が足りん。一億の咒力を溜めるのに百年が

掛かったのだ。とても今から新たなアンヴァリッドを復活させる咒力を発生させるための時間も人命も無い」

「月を離れ、どこか遠くの星に逃亡できはしないか。火星なり木星なりなんなりに」

「すでに百万人を火星に、五万人を木星衛星群に、三百人を冥王星に絶滅回避の為に逃避させている。それ以上の人間を受け入れさせる余力は各惑星にはない」

活発な…というより、自棄を起こしたように思いつき次第出される意見は、直ぐにハスドルバルに却下される。発言の細かい内容は分からないものの……切羽詰った感じは理解できる。

それをただただうなだれて聞き続けている。

胸が、痛い。

どうして、僕はこんな中途半端な身体で、記憶で、復活してきたのだろう……？

どうして、誰もが期待した救世主としての自分で復活できなかったのだろう……？

人類最強のアンヴァリッド『剣聖』ヤグチ・コウキ。僕だけが目前に迫った脅威、『腐敗王』ガモンハイドと闘える唯一の戦力であり……この閉塞した状況を救える救世主の筈だった。

それは決して十七歳の高校生などではなく、僕であって僕でない、僕の姿。自分でも信じられない未来（……いや、過去か？）の自分。求められ呼び出され、それなのに役立たず。

なぜ、肝心の記憶を、肝心の力を喪失しているのか、そんな自分が嫌になってくる。

ふと、エリーシャの顔が思い浮かんだ。

（エリーシャにも……嫌われたかな）

第一章 14

（エリーシャにも……嫌われたかな）

なんとなく、彼女にだけは嫌われないと思っている自分に気づく。それは夢の中の（デイド）女に似ているからか、それとも目覚めたときに一番近くに居たからか、他とは違う親近感を彼女に覚えていた。

でも、彼女の槍を避けられなかった僕は、彼女が望んだヤグチ・コウキではなかった。

美麗な顔を虚ろに染めて、僕が無力だと知った時の彼女の呆然とした表情。その顔が全てを物語っていた、僕は、この世界に、必要ないと。

鬱々と自分を責めていると、誰かの言葉が耳についた。

「サンサーラによって何でもいいから造り出せぬか？」

……サンサーラ？その言葉はどこかで聞いた覚えがある。顔を上げると、いかにも苦渋の決断といった感じで眉間に皺を寄せ、一人の上級騎士が主張していた。

「この状況ではサンサーラを行う事も止むを得まい」

「実験を強行して貴重な手駒と尊い人命を失った事をもうお忘れか。サンサーラは極めて成功率が低い。十年前の悲劇の二の舞に成りかねん」

「他に方法が無い以上、それが禁忌だろうが封印指定だろうがやるべきではないのか」

反対するハスドルバルとその上級騎士の議論を聞きながら、記憶の底を漁る。サンサーラ、その言葉を思い出そうとすると棘のような痛み。どこで聞いた言葉か、何か、重要な意味があったような……

……二人の口振りからすると、相当危険な事のようにだが。

僕が記憶を掘り起こしている間に、二人の議論は強行に反対するハスドルバルによって却下されていた。

レスレクティオ

「復活の失敗時点で、世界の滅亡は半ば決まったようなものだ……

…我々には、もう打つ手が、ない」

溜め息、いや、絶望混じりの老騎士の言葉で、再び議場は沈黙する。二度目の沈黙は、一度目よりも暗く、重い。

「いや　一つだけ、方法がある」

静寂の中でハスドルバルが重い口を開いた。

「失敗作であるそのヤグチ・コウキを……処分（、、）すればいい」

「え？」

処分　その言葉の意味が分からず、僕は硬直した。

「その失敗作を処分し、回収した呪力をもとに他のアンヴァリッドを復活させることは可能だ。多少グレードが下がっても、全く戦力にならんその失敗作と比べればマシであろう」

僕を睥睨しながら…威厳を持って、ハスドルバルは淡々と語る。

『失敗作』と、僕を断じて。

「ヤグチ・コウキの処分によって一割強の呪力が失われるが、その分を補填すれば他のアンヴァリッドを復活させることは不可能ではない」

断言するハスドルバルに迷いは無い。それが、他の騎士にも火をつけた。

「そうだ、処分しろ！」

「使い物にならぬアンヴァリッドなど必要ない！」

本人を前にして僕を『処分』することを声高に叫ぶ人々。その狂騒はまるで宗教裁判の様相を呈していて、十人の上級騎士のほぼ全てが僕を処刑台に送る事を要求する。

怖い。すごく、恐い。自分がこの世すべてから否定されているように。

ああ、そうか。恐怖ともに理解する。ただのヤグチ・コウキは、

この世界にいる資格はないんだと。この僕は、ここでは……『失敗作』なんだと。ここでは、誰も僕を助けてくれる味方なんていない、僕は孤独なんだと。

「待つがいい！」

その時、鋭い声と共に暗い円卓会議場に一筋の光が差した。

ドアを開け放って乱入してきたのは……

「……………エリーシャ？」

信じられない思いでその名を口にする。

第一章 15

「…………エリーシャ？」

信じられない思いでその名を口にする。

「ヤグチ・コウキを処分するということで会議が進んでいるようですが…………私は、それに反対します」

大人達を真つ向から見据えてキツパリと、エリーシャは断言する。
「エリーシャ！下がれ！君にはこの会議に出席する権限はないだろう」

誰かの怒声。しかし無視して歩み寄るエリーシャ。すれ違いざま、エリーシャが僕に囁く。僕にだけ、聞こえるように。

（大丈夫。あなたを処分なんて）

柔らかい声、僕を安心させるように母性的な微笑み。微かに立ちのぼる、甘い香り。

（絶対に、させませんから）

エリーシャは僕を護るかのように、僕の側に立ち、円卓の面々に話し掛けた。

「私はデイドのサンサーラです」

サンサーラ、また、この言葉。

「私には絶滅戦争の記憶がある。

私にはコウキ君と共に戦った体験がある。

私はこの場にいる誰よりもコウキ君の事を熟知している。

だから、断言できる　コウキ君は、どんな障害があるうとも、最後には必ず勝利を掴んでみせる、と」

力強い言葉にはなんの迷いも無く、

「エリーシャ・バルカの名に掛けて、コウキ君の喪失した記憶と能力を、私が、必ず、取り戻してみせます」

エリーシャが断言する。

僕は…………孤独なんかじゃない。僕よりも頭一つ小さな少女の健

気な応援が、凍りかけていた僕の心を再び暖めてくれた。

小さなエリーシャの体。でも、その姿は夢の中で見た人のように、大きく感じられた。

しかし

「これはしたり。『人類存続の為に必要な犠牲』を散々強いてきたバルカ家の言とは思えませぬなあ」

エリーシャの熱弁には、冷水をもって答えられた。否、それ所か、

「ふん、同じ失敗作どうし、随分と仲が宜しいようだ」

「な!？」

エリーシャをも蔑み、嘲弄する言葉。

「この生意気な小娘も、一緒に処分した方がよろしいのではないか？ハズドルバル翁。揃って役立たずだ」

「そうだ。『デイド』の聖名を継承できなかった御主の名を掛けて、一体何の価値があるというのか？」

エリーシャに向けられる言葉の刃の、集中口撃。聞いているこちらの方が痛々しい。

大の大人が寄ってたかつて少女を責める。その、醜悪な、光景。

「おまえら……………」

耐え切れなくなった僕が自分の事も忘れてエリーシャに助け舟を出そうとして……………

「シュベルトライテ」

ぽつりと呟いたエリーシャの片脇に浮かび上がった白銀の槍に、あつさりと僕の動きは止められた。

先刻、僕の胸を貫いた槍。白銀の、至高の芸術のように美しい

凶器。

すーっと、僕の身体から血の気が引いていった。

「エリーシャ！気が狂ったか!？」

「権威ある円卓会議に武器を持ち出すなど言語道断!」

騎士たちが椅子を倒して立ち上がり、暴拳に出たエリーシャに口角泡を飛ばして……

「……………ブリュンヒルデ」

「言語道断……………」

更に一本、今度はエリーシャの頭上に浮かぶ。

騎士たちの動きが止まる。口も止まる。

「ゲルヒルデ！オルトリンデ！ヴァルトラウテ！」

「こんご……………」

更に、更に、更に三本！

「ヘルムヴィーゲ！ジークルーネ！グリムゲルデ！ロスヴァイセエ

！……」

「……………どうだん」

続々とエリーシャの周囲に出現する神威兵器、なんと総計九本！僕を貫いたシュベルトライテに良く似た、でもどこか違う槍が更に八本。

「ま、まあまあまあ、落ち着きたまえエリーシャ君」

すっかり下出に出てしまった騎士たち。完璧に腰が引いてしまっている。

さっきまでうるさかったワンちゃんが、シツポを巻いてお腹見せてるような変貌ぶり。つまりは、白旗上げて完璧な降参のポーズ。

無理もない。実は、僕も物凄く怖かったりする。一本でも危険な神威兵器、それが九本もあるのだから！

「我々もちよいとばかり言葉が過ぎたのは謝るから……………と、とにかくまあ、槍を、その危険極まりないものを収めなさい」

脂汗を流しながら説得を始めた騎士をみて、

「名にしおう騎士ともあろう方々がそんなに取り乱して
み
つともないですよ」

冷たい、背筋が凍りつくような笑顔をエリーシャが作り……………

「イディジー・ヴァルキューレ、フレイエルフライ全弾発射！」

号令と共に、ミサイル火箭のごとく槍は放たれる。

「ぬおおおおお！？」

「ぎゃああああ！??！」

閃光一閃目は灼かれ、轟く爆音鼓膜を破かんばかり。破裂する円卓、穿たれる壁、騎士達は泡を食って逃げ惑い、暴れ狂うその威力、まさに『九人の怒れる戦乙女たち（イディジャー・ヴァルキューレ）』！

「あ、あわわわ……………」

一人何もできず目前の惨状にまごつく僕の手を、

「逃げます！コウキ君！」

片手にシュベルトライトを掴んだまま、エリーシャが、強く、引いた。

第一章 16

「逃げます！コウキ君！」

片手にシュベルトライトを掴んだまま、エリーシャが、強く、引いた。

「え、ええ？」

事態の急変に追いつけず僕は迷い

「『定型無き美術』アンフォルメル！」

瞬間、魔弾がエリーシャに直撃した。

「きゃああー！」

「うわわわああー！」

エリーシャが弾き飛ばされ、手を繋いでいた僕も同じく道連れになつた。

「その行為は人類社会に対する造反と見做すぞ、エリーシャ」

「…………ハッド」

倒れた傍らに、ハスドルバルが立っていた。この惨状に動ずる事無く、涼しい顔で。

老人とは思えぬ身のこなし、最少の魔力で急所をつく圧倒的な実力差で、ハスドルバルはエリーシャを取り押さえた。

「これだけ派手な破壊行為をしながら誰一人傷つけずにいるが……」

「その程度の覚悟で人類を救えるとも？」

「…………え？」

言われて、信じられない思いで辺りを見渡す。円卓会議場は瓦礫塗れで原型など留めていない。それは当然、なぜならこの全員を皆殺しにしても余りある攻勢魔法が炸裂したのだから。

だけど、確かに死傷者などはいない。憎たらしい口をきいた騎士も、エリーシャを侮辱した騎士もみつともなく逃げ惑っていたのに

…………無傷。

「…………くう」

ハスドルバルの一撃を受けて倒れていたエリーシャが槍を杖に立とうとして

「あう！」

「エ、エリーシャ！？」

ハスドルバルの硬い靴で頭を踏みつけられて、再び床に伏した。

「本気でコウキを信じるというのなら、此処にいるコウキ処分派の全てを抹殺するほどの気概と覚悟を持って…それすら出来ずに逃げ出そうとするなど、恥を知るがいい！」

エリーシャの小さな顔を、美しい髪を踏みにじりながらハスドルバルは語尾を荒げる。

「……それが、お爺様が一世紀以上貫いてきた『人類存続の為に必要な犠牲』ですか」

「非常の時である。非情の方策を採らねば、救えぬ」

髪を、顔を汚され痛めつけられながらも、エリーシャのハスドルバルを睨む瞳は燃えたまま。

「エリーシャよ、お前もバルカ家の端くれならば非情に徹する事を覚えよ。己が身が汚れる事を厭うでない…………でなければ、何一つ守ることなどできぬ」

ハスドルバルの『定型無き美術』^{アンフォルメル}が細い杖から、大木さえ伐採する大斧へと変化する。振り上げた刃先を、僕へ向けて。

（殺……………される！？）

血が凍え、身が竦む。老紳士の顔に少年の面影はない。ただ、無慈悲。

「せめてもの情けだ。蘇生も再生も追いつかぬように、殺してやる」

大斧が、振り下ろされ　　！

第一章 17

大斧が、振り下ろされ！

「『自由の為の闘争』！^{ルチャ・リブレ}」

「『熱狂の日々よ（ラ・フォル・ジュルネ）』！」

「！？くお？！」

右からハスドルバルの首を刈るように、また、左から足を薙ぎ切るように二つの魔法が交錯する！大斧は振り下ろされず、左右の魔法から身を庇う盾へと変わった。

「……………主人に楯突くか、下郎ども」

僕らの前から飛び退いて、ハスドルバルは舌打ち一つ。頭部は盾で守れたものの、右の足首に深手を負っている。

「我らは、お嬢様御付の身ゆえ」

「たとえ雇い主でもおー、可愛いお嬢様に手をあげるなら見過ごせませんわー」

代わって、巨漢の筋肉執事と小柄なメイドが僕らを守るように立ち塞がっていた。

「ネル！？ゴルヘグ！？」

驚くエリーシャにネルさんが手を貸して助け起こす。

「恩に着る……………礼はいずれ。さあ、行きますよコウキ君」

「ん、で……………でも」

エリーシャの小さな手が、その見た目を裏切る強い力で僕を引き起こす。

「礼など不要、これは従者の務め」

「行つてらっしゃいませー エリーシャちゃんコウキさま」

ハスドルバルから、武装を解いて殺気を放つ騎士達から目を離さぬまま背中では語る執事とこちらを振り向いて明るく手を振るメイド。いつどちらが口火を切ってもおかしくない緊張の中、エリーシャは僕を連れて先ほどのヴァルキューレで穴の開いた壁に近づき、

「騎士の城よ！私は必ず舞い戻る！
クラック・デ・シュバリエ

『剣聖』の力を取り戻したヤグチ・コウキと共に！」
そして、飛んだ。

「う、うわわわわぁおおお！？」

もちろん僕を道連れにして、まるで身投げのように、高い高い城の上から、飛び降りた。

一瞬の浮遊感、どうしようもない落下感。一瞬毎に迫り来る地上。
「し、死ぬ！死んじゃうー！」

「全く………飛び降りたくらいで殿方が取り戻すなんて、みつともないですよ」

喚く僕にエリーシャは僅かに顔を顰めて、

「『東方より来たれ風神』
ストリボーグ」

掛かる急制動。

「……と、飛んでる？」

白銀の槍に、シュベルトライテ魔女のホウキよろしく跨って飛行するエリッサ、に、しがみつく僕。

「もっとしっかり掴んでください！振り落とされますよー！」

「しょ、しょんなこと言ってもおおフ！？」

僕の腕の中にすっぽり納まってしまふようなエリーシャの小さな小さな体は、ほんの少し力を込めれば崩れそうに繊細で、躊躇してしまう。

なーんて逡巡する間も無く、

「う、うわわわわ！？」

本気で落ちそうになったので思いつき抱きついた。

「や、ん！？あ、そ、そう！そんな風にしっかりと掴まってください。」

絶対………絶対に、離さないで！」

抱きつく僕の腕に、エリーシャの小さな手が添えられる。仄かな、暖かさ。

「コウキ君の力を………お借りします！」

瞬間、僕の身体から、エリーシャに何かを吸い出されるような感覚。

「ふ、ふえ？な、なにこれ？」

気持ちいいような、悪いような、何とも不明瞭な感覚に訝つていと、エリーシャの術が、発動した。

「テラ・インコグニタ 仮想魔術『未知の領域』！」

「う　わあああああ！！??？」

揺れる三半規管、壊れる水平感覚。

ジェットコースターなんてメじゃない、急加速と、それに伴う強烈なG。エリーシャが言う様に振り落とされそうになって、ますます強くエリーシャの小さくて柔らかい体を抱きしめた。

瞬時に小さくなる『騎士の城』。ブラック・デ・シュバリエ

瞬時に大きくなる『黒い地球』。

時間に取り残された迷子にとつて、何一つ現実感の無い世界。抱き締めたエリーシャの体温と甘い匂い、頬にかかる黄金の髪だけが現実だった。

第二章 1

第二章 B l e e d f r o m w i t h i n

圧倒的なスピードに呼吸を止めて数秒、

「コウキ君、コ・ウ・キ・君」

「……………ぴえ？」

以外と早く、速度は緩まり始めた。

「もう大丈夫ですから、その……………ちよつと……………手を緩めてくれますか」

「あ、ご、ゴメン。痛かったよね」

速度の低下とともに、僕の力も緩める。

（強く抱きつきすぎた……………かな）

エリーシャの華奢な身体が赤く染まっている。必死だったとはいえ、女の子にしがみつくとはい、ちよつと男として情けない。

密着していた体を離し、何とはなしに周りを見て、初めて気づく。

「ここ……………宇宙？」

視界の九割を占める虚無色^{くろ}、前に見えるは冥い地球、後ろに見えるのは仄明るい月。

ぼかん、と間抜けな顔をした僕に、エリーシャは微笑み返す。

「ここまで来れば、そう簡単に追いつくことも出来ないでしょう」

「逃げすぎな気もするけど……………」

軽口を返しながらも、僕は戦慄にも似た振るえを止められなかった。

有重力下での飛翔魔術から、街を脱出する際に天井を破壊しなかった事から考えるに物質透過魔術も使用したであろう。宇宙に移ってからは空気の発生・適正温度の発熱・宇宙線からの保護・その他諸々からの生命維持の為の高位魔術の同時多重起動、常人では試み

るだけで心臓が破裂しかねない難事を、涼しい顔で実行している。それも、一人分ではなく二人分の魔術を！

この少女のどこが失敗作だというのだろうか？

空恐ろしくなるほどの魔術の冴え。僕の知る限りでは、世界有数の魔術師で無い限り不可能な曲芸。

「それにしても……………私の不完全な仮想魔術でもここまでの加速ができるとは……………」

対して、エリーシャの方も何だか身震いを隠せない様で、

「追尾も探査も捕捉すらも不可能なほどの加速　記憶にはありましたが、これほどとは」

肩越しに微笑んで、一言。

「やはり、コウキ君は能力を失っているわけではないようですね」
「　　そう、なの？」

口元は聖母のように柔らかく目元は戦乙女の如く凜として、少女は微笑みを形作る。

「記憶と共に、能力の使い方　『技』を忘れてしまっているだけ……………数日ほど鍛錬すれば、再び能力を使いこなせるようになるでしょう」
「　　ほんと……………に？」

「ええ。私が責任を持ってコウキ君を鍛え直してみせます」

それは、僕の不安を全て全て霧散させるほどに、輝かしい笑顔。

『中途半端』で『期待外れ』で『戦力外』で『役立たず』

僕が目覚めてこれまでに味わった、そんな全ての劣等感が消されるほどの力強い言葉と微笑み。

虚無と暗黒の世界の中で、エリーシャを構成する三大色素が、目映いばかりに僕の目に飛び込んでくる。

彼女の黄金が、僕の心の中で光に成る。

彼女の純白が、僕の心の中で羽に成る。

彼女の青が、僕の心の中で空に成る。

ドクン、と胸が高鳴った。

エリーシャは顔を正面に戻し、代わって肩越しに見せるのはピンと立てた人差し指。

「言っておきますが、私の特訓はスパルタ人も血の気を失い、軍特殊部隊も裸足で逃げ出し、一流アスリートも泣き喚く過酷さですので、コウキ君もしっかりと覚悟を……」

「ありがとーエリーシャー!!」

「え?や!?キヤア!?!」

嬉しさの余り、後ろから思いっきりエリーシャに抱きついた。

「僕、頑張る。うん、ぼくがんばるから!特訓でも修行でも何でもやってみせるから!」

嬉しかった。とにかく嬉しかった。他の誰よりも、この少女に勇気づけられた事が励みになった。

「わ、わかった!分かりましたからあ!そ、そんなに抱きつかないでコウキ君!」

「あ、ゴメ、嬉しくてつい……」

悲鳴スレスレのエリーシャからパツと手を離す。

「も……もう、私ってばなんて声を………うれし………みっともない………」

(怒ってるなあ……耳まで真っ赤になつて)

エリーシャは深呼吸して息を整えてから、

「嬉しかったらすぐに人に抱きつくんですか?犬ですか貴方は」

第二章 2

「嬉しかったらすぐ人に抱きつくんですか？犬ですか貴方は」

口先尖らせジト目で一瞥くれるエリーシャに恐縮しつつ、しどろもどろに弁解する。

「いや……………何でだろ？今までこんな気持ちになったこと無いんだけど……………」

ぽりぽりと指で頬を搔いて、視線はエリーシャから外れて右往左往。
「なんとというか愛しさ募ってというか、可愛さ余ってというか……

……」

「……………」

「何でだろ？何でかな？胸の奥がギューツとなって、こう、うーん？」

自分でも良く分からない感覚を説明するのは難しい。

「……………いいです、もう。聞いてる方が恥ずかしくなってきました」
結局、すぐにエリーシャに止められた。

「コウキ君。そんな気持ちになる度に誰彼なく抱きついたりしていたら、いつかセクハラで訴えられますよ？」

「せ、せくはら？そんなつもりじゃなかったんだけど……………」

「初犯が私でよかったですね。私は訴えなどしないので安心してください。」

ですが、そんな風にむやみに抱きつくのは、以後禁止します」

「……………禁止……………善処します」

頷く僕に、エリーシャは笑顔で了承。が、即座に難しい表情になつて、

「はあ、それにしてもコウキ君は年上相手だと硬直してしまうのに、
年下相手になるとスキンシップ過多になるのですね……………嬉しいような悔しいような……………複雑です」

なんだか口の中でもゴモゴと一人言を呟いていらっしやるエリーシ

ヤ。少し話しかけるのを躊躇ったが、

「それで、特訓って何するの？宇宙でやるの？」

「……………そうでした。まずはコウキ君の武装を取りに行きましょう。修行も鍛錬も何もかも話はそれからで」

スウ、と二人を乗せた銀の槍が動き出す。地球に背を向け、月に顔を向けて。

「月に、ウトナピシュテム街に戻ります」

灰一色の月面平野。荒涼とした乾いた大地。

嘆きの海と言われるその場所に、引くも進むもままな儘成らぬ哀れな人間の寄り合い所帯が一つ。

「あれが……………ウトナピシュテム」

なんて頼りない灯り。

地球を失った迷子たちの避難所。アジール

地球の大きさと比べて、何て卑小な棲み処。

地球の七大海六大陸の広大さと比べては、もはや穴倉同然。

悲しくなる。生まれ故郷ちきゅうの素晴らしさ暖かさ優しさを知らずに、あんな所で百年も人は細々と生きてきたなんて。

何よりも、此処には空が無い。青い空が、どこにもない。

星を包み、命を守り、命を育む青い空が無い……………それが、とても、悲しかった。

第二章 3

と、感傷に暮れる僕には気づかず、エリーシャはポンッと手を打って一言。

ウトナビシユテム

「街に戻る前に、少しは偽装しないと」

「偽装？」

問いには答えず、エリーシャは後ろ手で髪を束ね、

「あ？」

エリーシャの綺麗な髪が、腰まで届く芸術品のように見事な髪が、光そのもののような髪が……断ち切られた。

何年も掛けて伸ばし、日々たゆまぬ努力無くば維持出来ないような髪を惜しげもなく。

「咲き誇り（アグライア） 匂い馨し（エウプロシユネ） 華一輪^{アイ}」
タレイ

行動の意味が分からず絶句する僕をよそに、断たれた髪を触媒に早口で呪文を唱え、

「散りぬる前に（カリス） 恋せよ乙女！^{カリテス}」

髪が、光に変わる。今度は比喻でなく、本当に光に！

「わ、わわわ！？」

あまりの光量に腕で顔を覆う。それでも眩しさのあまり、きつく閉じた目蓋の奥まで届いて頭は白む。

「わ……………わあ？」

十秒近く続いた発光で、瞳はチカチカ頭はクラクラ。視力がまともにも働かない中、

「ああ 想像していた以上に可愛らしく」

「……………ふえ？」

なんだか随分嬉々としたエリーシャの声が聞こえてきた。

途端に気付く。

なんというか、違和感。体のあちこちに、なんとも言い知れぬ違和

感が……

「え？なに？何？どうなったの何したの？」

「どうぞ御自分で確認を」

ポンっと、女の子の必需品コンパクト。

確認します………しました。

変化1 髪が伸びました。サラサラのロングヘアです。女の子みたいに。

変化2 なんだか服が変わっています。フリル付きです。そしてスカートです。女の子みたいに。

………女の子みたいです。

てゆか女の子です。どう見ても。

「な？ななな！何故に女装！！??」

「魔法使いともあろうものが性転換程度で取り乱すなんて………みっともないですよ」

「性転換！？せいてんかぁん?!」

想像の斜めに上回る回答に更に声を上擦らせる。

「うわあああ、なんか膨らんでるし!？」

「Bカップあるかないか、くらいでしょうか？」

「さ、触らないで。そして、そんな冷静に計らないで」

「大丈夫ですよ、今の私よりは大きいですから。同年代の平均サイズは下回っているでしょうけれども」

「なんだかそっちこそセクハラじゃないの？それにそういう問題じゃないし」

とりあえず両手で胸をガードしつつ、ああ、なんか女の子が胸を見られたくない気持ちばかりかけてしまっし。

「服もー、なんかー、フリフリだしー」

可愛い子以外が着ると物凄い非難を浴びそうな、フリル付きの服。「これでこの娘が伝説の『剣聖』ヤグチ・コウキとは一目では見破られないでしょう」

「……絶対に見破られない事を願うよ」

この変化魔術の巧みっぷりは、やはりハツドの親類だからだろうか？

「コウキ君はもとも女顔ですし、性転換しても違和感がないですね…良い事です」

「何がいいんだか。なんでこんな……性転換なんかしなきゃなんないの」

「追手の目を欺く為でもあります……何よりコウキ君を一般人の目から遠ざける為です。」

貴方の顔も名前も、月の民一億が全て知っていますから……あの姿のままでは街中で行動など到底不可能でしょう」

説明を聞きながら、ふと、露わになった項^{うなじ}を見て、ハツとする。

「あの……ごめんね。僕の為に、髪……切らせたりして」

三分の一程度の長さになった少女の黄金。

腰まで届いたロングヘアが、肩口までのセミロングに切られている。

髪は女の命という。ましてやこれほどの美髪。切るにはよほどの覚悟が要るだろう。

「いいえ、最低限必要な措置でしたのでコウキ君が謝る事など何一つありません。男女一組より、女二人でいたほうが追手の目も欺けますから」

僕の謝辞を些細な事と受け止める少女。

「それに……少しだけ、髪を切ったことで私の気持ち became 楽になった面もありますので」

淡く微笑むエリーシャ。その言葉の意味を図りかねて、言うかどうか迷いつつも、口にする 率直な感想を。

「あの、その、それから……その髪型も、すごく似合ってるよ、なんていうか、

お嬢様度DOWN

生真面目さ・委員長っぽさ・親しみやすさUP

で、感じ。

「……………不意打ち、です」

瞳をまんまるにして、硬直しているエリーシャ。あ、なんかこどもっぽい顔になってる。

三度朱に染まる純白の肌。ただし今回は真っ赤にならず、淡くほのかな桜色に染まる。

んー、言葉まづかったかなあ……………？また怒らせたかも……………

「も、もう！早く行きますよ」

「え、ちよつ、わ！？急発進反対！」

第二章 4

「お、可笑しくないかな？可笑しくないよね、ぼく」

「服装は可笑しくありませんが：拳動は怪しいですね。もう少し落ち着いてください」

「う……………うん、善処する」

慣れないスカートを手で抑えながら、エリーシャに街を連れて行かれる。

「自信を持ってください。コウキ君は可愛い女の子に見えますよ」

「……………自信を持つのも、やだなー」

なんとなく黄昏ながら街を進む。

人が傍を通るたびに、誰かが僕へ視線を向ける度に、女装……………じゃないや、性転換がバレるんじゃないかと鼓動が乱れる。

「大丈夫ですよ、いみじくも私の髪を使ってまで行った術　ハスドルバル叔父様並みによっぽど変化魔術に長けた者にしか見破られは致しません」

「そもそも…この格好が恥ずかしいよお……………」

ナニこのムダなフリフリヒラヒラ。誰の趣味さ？肌の露出が少ないただけまだマシだけど。

宇宙の小旅行を終えて、再び降り立ったウトナピシテム。一世紀の時間を越えた未来都市は……………普通だった。

空が無く金属製の天井が覆っていて、いくつも見慣れない乗り物が走っている以外は、僕の知っている時代の街並みとそれほど大差ない。

街行く学生、サラリーマン、買い物の主婦、散歩するお年寄り、どこでもいつでも見かけるような、普通の光景。

二人で街中を歩く。危険を冒しつつ平静を装って、内心色んな意味でドキドキしながら。

目的地まで約一キロの散歩コース。

なんでもレーダーの合間、監視カメラの盲点の中を進まないといけ
ないから、どうしてもこの街中を歩いて突っ切らないといけな
いら
しい。

（ああ、なんとなく公開羞恥プレイ？）

恥ずかしさからディープなベクトルに思考が落下していく。

第二章 5

そんななか、ぼんやりと街頭のテレビを見ていて、一つの映像に釘付けになる。

肩口に羽織った着物を翻し、閃く剣刃十重二十重。

捻り、うねり、飛び上がり、切り上げ切捨て、息つく暇ない人間業とは思えない過激で度肝を抜くアクションの数々。

ワグナーを思わせる狂騒的な音楽効果と相俟って、道行く人々も思わず足を止めてテレビに魅入る。

時折フラッシュバック気味に『He's Coming』というテロップが挿入され目に焼きつく。

あー、映画CMかなー、と思っていたら最後にアップで映った顔は、

「こ、これ………僕!？」

まごうこと無き自分の姿。思わず叫ぶ。

反して平静を保つのはエリーシャ。

「政府公告です。救世主ヤグチ・コウキの」

「ふええ!?!?公告!?!?」

「颯爽・英明・勇武・可憐・絢爛・剣舞・挺身・疾風・美勇……

そして最強」

スラスラと出てくる単語はなんだか背中が痒くなるようで、

「それぞれ『強さ』『優しさ』『カリスマ』を主眼とした三バージョン、月の民一億の老若男女に広く希望と理解を戴けるように制作致しております」

なんというか、二 一倍くらい美化されている気がするのですが?と、言う間もなく次の政府公告が………

次は、音楽は無し。ただ風と、草木のそよ音だけがする。

「実際に百年前の絶滅戦争中に撮影されたコウキ君の画像を使用しております」

ひらひらとサクラ舞い散る中、夜桜の幹に体を預けて静かに微笑

む僕の姿。

とても静かで、されども情緒豊かで、古式ゆかしく、そして静かな決意を秘めた佇まい。

音も無く、動きも無く　それでも得も言われぬ説得力を放つ光景は、最後にこう締めくくられる。

曰く『大丈夫、みんなは僕が守るから』

途端にキヤーッと黄色い悲鳴。なんだか女子中学生らしき一団が僕の映像を見て騒ぎ立てている。

「やーん、コウキきゅんかつこいいー」

「かわいいー、あれで強いなんて反則よね」

かましい悲鳴。真横に当人がいるとは思ってもいないだろうが

「……………」

「一部、加工はしていますが」

えーっと、どこを加工すれば僕なんかこんなに変化されてしまうんだろう。

「コウキ君の魅力を余すところ無く伝え広める為に、私も制作に参加し苦心致しました」

誇らしげに

胸に手まで当てて

エリーシャ。

すいません、僕の方は恥ずかしさでグロッキーです。なにこの公開羞恥プレイっぷり？

「ええ、みなさんにも好意的に受け止められ、コウキ君は大変人気もあるようなので私は嬉しいです」

なんとというか、まあ……………実に空気がくすぐったいです。

ふと気付く。街中に氾濫するものに。

「ポスターもある」

壁には『一体何万倍美化したのか!?』という僕のポスターが貼られ、

「ほ、本も!?」

漫画に雑誌に新聞の特集記事と僕の事が目白押し。各見出しには

『三十分で分かる！救世主コウキキの全て！』

『ちっちゃいけれど救世主！』

『パクツちゃえ！剣聖のスタイル』

『剣聖が腐敗王に勝てる百の理由』

「三十分で分かれちゃうんだー、ぼくー」

あつはつはつと頭が痛い。

「……………こつちもエリーシャが作ったの？」

「いいえ、政府広告以外は民間会社によるものです」

「ああ、写真集まであるし……………平積みだし……………なんか、買ってる人いるし……………」

「救世主がどんな人なのか、ヤグチ・コウキはどんな人物なのか、剣聖が如何なる技を使うのか、アンヴァリッドはどんな力があるのか……………」

にっこりと微笑むエリーシャには一点の曇りすらなく。

「みんな、知リたがつているのですよ」

（あー、これは確かに変装くらいしとかなないと、出歩けないなあ……………）

ヒラヒラのスカートを軽く指で摘む。少し俯くだけで長い髪が顔に掛かる。

今だけはこの性転換に感謝しよう。あのヤグチ・コウキと今の僕が同一人物だとは、とてもとても知られたくは無い。今の僕にとって、全くの別人になっていることが精神的に救いとなっていた。色んな意味で。

安堵と黄昏の混合した溜め息をついた瞬間。異質なものが、目に飛び込んできた。

安楽死 ユータナジイ
一人百メレム^④

張り紙一つ、素っ気無く張られた異様。

第二章 6

浮付いた意識は消えて体温は一気に氷点下。

「どうして、こんな、ものが……」

『戦争で未曾有の苦しみを味わう前に、世界の終焉を目にする前に、人類の絶滅を体験する前に』

張り紙には、こう綴られている。

『安楽死、しませんか』

普通の光景、と思っていたものが、瞬時に色褪せていく。

この張り紙だけではない。

近くの薬屋に、本屋に、店舗に、それは並んでいる。

『安楽死の薬 処方します』

『苦しまずに死ぬ方法』

『安楽死代行業務 死後の整理請負ます』

見れば、視るほど、飛び込んでくる、不吉。

「……分かりましたか、コウキ君」

悲壮な顔で、『安楽死の薬』を見つめたまま動かない老女を見つめて固まっている僕に、

「大袈裟なほど、馬鹿らしいほどあなたの宣伝広告を流さなければいけない理由が」

道の端には大きな教会、祭られているのは 『剣聖』 ヤグチ・

コウキ。

目を閉じ、跪き、両手を合わせ乞い願う老若男女。一心不乱に『御救い下さい、御救い下さい』と呟くさまは、見ていて……肝が、冷える。背中から冷たい汗が流れ落ちる。

どこでもいつでも見かけられるような？何を馬鹿な！

全く持ってこれは末期状態ではないか。

僕から少し距離をとってエリーシャが呟く。

「コウキ君、表面上は普通に見えますが……もう、この世界は限界

なんです」

微笑には苦味を含んでいて、瞳は真剣。言葉にはピリピリとした緊張感。

「次に行くところで……この世界の現実が見えてくると思います」
自らの病を告白するかのような口調に、我知らず息を飲み込んだ。

第二章 7

緊張は呆気なく解けて拍子抜けする。

わんわん、にゃーにゃー、ぐるるる、きーきー、ぱおーん。

象が長い鼻を使って水浴びし、パンダが隅っこでごろごろし、カンガルーが飛び跳ね、コアラが樹上からギロリと睨みつける。

様々な動物達が鳴き、唸り声を上げ咆哮する度に幼いこどもの笑い声が賑やかに響く。

『サクラメント中央動物園』は親子連れのはのぼりとした雰囲気に含まれていた。

「エリーシャ……ほんとにここ？」

「ええ、ここで間違いありません」

しかしエリーシャの眼光は場違いな程に鋭い。園内の動物を見る表情は沈鬱で、まるで痛みに耐えるよう。

動物、嫌いなのかな？

いや、でもそれなら動物園になんか連れてこないだろうし……エリーシャの目的が分からずに、僕は困惑する。

黙々と動物園を進むエリーシャに遅れないようについていく……と、足が何かに引っ張られ、

「あー、フェレットだー」

見ると、フェレットがズボンの裾に噛み付いていた。可愛らしい動物に、思わず顔が緩む。抱き上げると「キュキュ？」と細く鳴くが抵抗は無い。それどころか身体を伸ばして

「あはは、おまえ随分人懐っこいなー」

すりすりと頬擦りしてくる。長い毛並みがすべすべして肌触りがよく、清潔にしているのか臭いもほとんどしない。

「動物は、相変わらず好きみたいですね」

目を細めたエリーシャが、声を掛ける。

エリーシャばかり見ていたので気づかなかったが、周りのこともうさぎを抱き上げたり羊を追っかけたりしている。危険な肉食獣でなければ、気軽に触れ合えるらしい。

「うん、動物は好きだよ。実家では犬とか猫とか小鳥とか色々飼ってたしー」

可愛い小動物を抱きしめて喜ぶ僕に、しかしエリーシャが冷たく言い放つ。

「……………その仔、ロボットですよ」

「え？」

突然の言葉は思いも寄らず、固まる僕からエリーシャはフェレットの首根っこを掴んで、ひょいっと取り上げる。

「電源を切ってしまえば…ほら」

エリーシャが首の後ろを触り、カチリ、と無機質な音一つ。直後にだらりと四肢を伸ばすフェレット。死んだように全く動かない。

「ろぼっ……………と？」

動かなくなったフェレットを信じられない目で見る。本物としか思えなかったのに…

「なんで、どうしてロボットなんか」

声を荒げかける僕を遮ったエリーシャの言葉は、更に衝撃的だった。「もう、その動物は…絶滅してるんです」

エリーシャの淡々とした言葉は、却って深く、僕の心を、挟る。

「その仔だけじゃありません。此处にいる動物はみんな……………ロボットです。」

おかしいですよ？動物園なのに、此处に生きた動物なんて一匹もないのですよ」

……………ほのぼのとした動物園の光景が、突然空虚なものに豹変した。動物機械を見て喜んでいるのはモノを知らぬ子供だけで、カラクリを知っている大人たちの目は乾き……………虚ろに微笑んでいる。

エリーシャは微笑む、憐憫の眼差しで動物達を見ながら。

「嘗て世界にこんな動物が居た…ここはその記憶を風化させない為に作られた施設」

わんわん、にゃーにゃー、ぐるるる、きーきー、ぱおーん。

様々な動物達が鳴き、唸り声を上げ咆哮する度に、薄ら寒い感情が頭を巡る。

機械仕掛けの贗作動物公園、どうして、そんなものが存在するのか、考えるまでも無く………答えは、無慈悲に、告げられる。

「そうですコウキ君…此処の動物は、みんなとつくに絶滅してしまっているんですよ」

第2章 8

『絶滅回避研究所』……その施設は動物園の片隅にひっそりと建っていた。

開放的な外の施設とは全く異なる空気……冷たい檻の中に、生き残った僅かな動物が閉じ込められている。

「もともと箱舟計画は、二、三十年の期間を想定したものでした」
暗い廊下を歩きながら、淡々とエリーシャは説明する。

「ミゼリコルディアの魔の手が届かない、安全な月で反撃の為に戦力を整える……一億人の人命救助だけの計画ではなく、次世代のアンヴァリッド育成、地球を取り戻すのに必要な戦力を養成する、その為の計画なんです」

檻の中には一握りの動物がいて、人工繁殖や……単に絶滅を遅らせる為だけの延命措置が行われていた。見ていて愉快なものでは、決していない。

「ですが、腐敗王ガモンハイドの侵寇によって……全てが狂ってしまった」

空っぽの檻も数多く存在する。そして其処には、必ずプレートが掲げられている。

「ガモンハイドは私に封印されましたが……封じられた身のままで、ずっとこの箱舟に干渉しています」
デイド
ウトナヒシユテム

『ツキノワグマ 二一年絶滅』 『二ホンサル 四四年絶滅』 『レッサーパンダ 四五年絶滅』 『アビシニアン 四六年絶滅』 『オオカミ 四七年絶滅』 『ゴールデンレトリバー 四九年絶滅』 『プレーリードッグ 五〇年絶滅』 『カンガルー 七八年絶滅』 『ワラビー 七八年絶滅』 『ゾウガメ 七九年絶滅』

……絶滅を阻止できなかったという無念を刻んだプレートを、掲げて。

「封印されたガモンハイドは、アンヴァリッドに必要な咒力を奪い

続けています。

その所為で、当初の計画では三十年もあれば十分な数のアンヴァリ
レスレクテイオツドを復活できる筈だったものが、十分な咒力が確保できずに、百
年目の今日まで……コウキ以外に誰一人復活させることができませ
んでした」

研究所の職員達の顔は、おしなべて暗い。自分達の無力を呪うか
のように、悲愴。

「当初三十年の計画の為に造られた箱舟は……ウトナビシユテム計画の失敗や長期化に
備えて五十年は保つ様に設計されていますが……一世紀という長期
間の為には造られていないんです」

生命維持装置に繋がれて、横たわる一匹の老犬……もはや種を存続
させるペアもおらず、自身の生命も風前の灯火。滅びを待つだけの
老犬の瞳に力は無く光は無く……ただ、絶望だけが其処にある。

ウトナビシユテム「箱舟は老朽化の極みに達しています。」

生命維持装置は正常に作動せず、引き起こされる事故で年間平均一
万人が死亡する。

食料プラントは耐用年数を遙かに越えつつも稼動を余儀なくされ、
慢性的に食糧不足。

水質浄化装置は限界を超えて飲料不適格の水を使わざるを得ず、体
調を悪化させる」

飛べない鳩はこの閉塞した世界に圧迫感を覚えるのか、せつかく
孵化した雛を自ら食い殺して研究員を嘆かせる。

「産児制限や技術改良、魔法による応急処置……みな**の**必死の努力
ウトナビシユテムでなんとか誤魔化していますが、箱舟は……社会を支えきれなく
なっ

てきています」
立ち止まって振り返るエリーシャ。

「分かりますか？コウキ君」

感情を窺わせない能面のような表情で、エリーシャはそれを見せ
つける。

「此処に居る動物達の姿は……このままでは月の人間の辿る『末路』

そのもの」

既に絶滅した動物達の夥しい数の骸を。

「このままでは……例えばミゼリコルディアの侵寇がなくとも……数年のうちに人間は絶滅します。人類に希望は……ないんです」剥製となった動物達が、恨めしげな顔で僕を見詰める。

「コウキ君……」

暗い研究所の中でエリーシャの瞳が、

「コウキ君だけが……人類の希望……なんです」

エリーシャの青い瞳だけが、言葉を失った僕を、場違いなほど優しい光を湛えていた。

第2章9

奥へ、奥へ、陰鬱な空気が更に濃度を深める通路を　　奥へ。
絶滅動物の博物館を突き進み、踏み込んだのは鳥類の絶滅回避研究
所。

此处でも同じく等しく、何もかもが絶滅へ向かっている。

『鷹 絶滅』『鷲 絶滅』『隼 絶滅』『鳶 絶滅』
飛べない鳩はこの閉塞した世界に圧迫感を覚えるのか、せつかく孵
化した雛を自ら食い殺して研究員を嘆かせる。

『燕 絶滅』『雀 絶滅』『鶇 絶滅』『鶇 絶滅』

飛べない鴉は自らの羽を抜いて抜いて抜き続ける、コンナモノは要
らぬというように。

……息が詰まる、胸が痛い、呼吸が苦しい。閉塞感から身体が不
調を訴える。

いつの間にか通路は階段へ変わっていた。

中央を中抜き吹き抜け状にして、地下へと下るは螺旋階段^{スパイラルラダー}。右に寄

れば絶滅鳥類の剥製に睨まれ、左によれば飛び降り自殺。

一段踏み外せば一巻の終わり、なんと命の容易く失われる事か。一

段一段慎重に、気がめいる程に、慎重に

吐き気、頭痛……本格的に体調の悪化を感じかけた時、

(…………あ)

エリーシャが、無言のうちに僕の手を握っていた。

あたたかい。

不思議な事で、それだけで苦しみがスウッと軽減する。強く握り締
める。小さな手を、柔らかな手を。

足が、止まった。微笑みながら、エリーシャは右の実験室を指差す。

金糸雀^{カナリア}、一羽、籠の中。

羽は抜け、痩せて、よろめいて、それでも命を繋いでいる。

震える体の下には、小さな小さな卵。卵には罅^{ひび}、それは絶望？…否、

それは希望の印。

割れる卵の殻、覗き出る小さな嘴、卵の中が外気に触れる。ピピ、ピピピ？と雛が鳴く。それは誕生の歌。ピリリ、ピーピッピと親鳥が囀る。それは歓喜の歌。

まだ目も開かぬ雛が、一生懸命殻を破こうとしている。親は囀り続ける、励まし続ける、だが手助けはしない。

まず一つの卵から、殻を破って雛が完璧に殻を破って這い出てきた。ピリリ、ピーピッピと親鳥が囀る。

『生まれてきてくれてありがとう、可愛いボウヤ。私がママよ』
と言うように。

雛は小さく羽ばたき、母に甘え、すぐに他の卵へ近づく。ピピ、ピピピと雛が鳴く。それは応援の歌。まだ殻を破りきれない弟妹たちを助けるために、最初に生まれた雛が外から殻を破る。

果たして兄の助力を得て、二羽目三羽目の雛が殻を破る。

その頃には籠の中は大合唱で、なかなか殻を破れない四番目の……最後の雛を応援する歌は随分賑やかになっていた。

みんなで協力して最後の弟妹が生まれるのを応援する。親は励まし、一番上の雛は殻を突付き、二番目の雛は卵の傍で始終歌い、三番目の雛は羽ばたきながら見守り続ける。

やつのことで殻を破った最後の雛を、全員で祝福する。

金系雀一家の大合唱が始まる。

弱りきった体で力強く歌う親鳥と、小さな体で元気良く歌い上げる雛達の、凍りついた『絶滅回避研究所』を溶かすような、五重奏。それはエリーシャにとっても望外の幸せだったようで……愛しげに雛を見つめる青い瞳が、熱っぽく潤んでいた。

左手にはエリーシャの温もりが伝わり、実験室のガラスに触れた右の掌は冷たいけれど、微かに……幽かに、金系雀たちの大合唱で震える鼓動を、生命の歌を感じた。

第二章 10

終点に着いた。暗い暗い闇の底に。

「此処に、コウキ君の武装があります」

沈んだ空気、冷えた空気、重い空気……………空気の密度を感じる空間に、

「お久しぶりね、エリーシャちゃん。髪を切ったの？とても似合っていて素敵だわ」

「ありがとう、お婆様」

美しく老いを迎えた、老婆が一人。エリーシャが駆け寄っていく。手を繋いだままの僕も、引きずられて。

「あらあら、可愛い子ね。エリーシャちゃん、あなたがお友達を連れてらっしゃるなんて珍しいわ、どなたかしら？」

「友達といえますか…この娘がコウキです」

「は？」

面食らった老婆に、エリーシャは簡潔に説明する。僕が、偽装の為に性転換したことを。

「う、うう……………こんな格好したくないのにエリーシャが無理やり」

「あ、あらあら。そうでございましたの……………その様な事が……………」

「まあ、ここまできたらもう解除してもいいでしょう」

「ちよ、え？いきなり!？」

ぽん、と軽い音を立てて体と服が変化する。

胸が縮んで、髪が短くなって、男の体に、本物の僕に戻る。

「あらあら、本当にコウキ様だったのね」

驚きはそのまま笑顔に変わり、笑顔から即、居住まいを正して、
「では、改めてはじめまして、御先祖様。

私はヤグチ・ヒカリ……………」

「ヤグチ……………？え？それって？」

「あなたの妹、アカリの孫にあたります」

「僕の……アカリの……子孫？」

面食らうのは、今度は僕の方だった。

「光栄ですわ、伝説の『剣聖』にお会いできて。けれど悲しいですわ、これで本当に戦争が始まるのだと知らされるようで」

アカリには似ていない……でも、どこかに面影がある老婆。ヒカリさん

「アカリ様がこの動物園と絶滅回避研究所を建てられてより百年……我らヤグチ宗家は此处で多くの動物達の生と死を見てまいりました」

目尻に浮かんだ皺は、どれだけの苦渋を刻んできたのか。

「ええ、多くの多くの生き物が……弱っていく様を、狂っていく様を、滅びていく様を」

震える睫毛の下の瞳は、どれほどの涙を流してきたのか。

「看取って……参りました」

言葉にはどれ程の重みがあるのか、とてもとても窺い知れないけれど　この暗い暗い闇の底には、百年分の重みが積み重なっているのだけは、理解できた。

「話したいことは、伝えたいことは、語りつくせぬほど御座います
が、今はまずコウキ様の為の武装を復活させましょう」

「僕の、武装を」

「ええ、失礼ですが、お手を……」

言われるままに両手を差し出す。

重ねられる手、歳と共に水気を失った手、年齢を重ねた手……

人生を感じさせる手、ヒカリさんの手が、僕に触れた刹那、

「！？う、うわわわわ？！」

ヒカリさんの手が僕に握りつぶされた！！

一瞬前までそこにあつた手が無くなっている！

目の前で、指は、手は、手の平は人間には無い器官、羽へと代わっていく。

「あらあらそんなに怖がらないで御先祖様」

「！？？？！」

悲鳴を上げる僕をからかうようにコロコロと笑いながら、ヒカリさんは、ヒカリさんは手から腕へと羽に変わっていく。

「私は嬉しいの、ちゃんとして役目を果たす事ができて」

腕から肘まで変わった羽が僕の周りに散らばってゆく。

体が羽に変わるたび、時が戻るように若返っていくヒカリさん。最早その姿は老人ではなく、中年の女性へと。

「頑張つてね、御先祖様。」

ガモンハイドは強いだろうけど、御先祖様の力なら必ず倒せるから羽が飛び散って体は縮む。体が縮むと、若返る。若返ると、体が削れる。

「負けないでね、御先祖様。」

みんなの期待に押しつぶされそうになっても、負けたらダメよ」グロテスクと神聖さが融合も分離もせずに並列する光景と、そんな自分の怪現象など意に介さぬヒカリさんの激励に、

「大丈夫！大丈夫だよ！みんなは　みんなは僕が守るから！」妙齢の女性へと若返ったヒカリさんを抱き締める。強く、強く、決意が伝わるように、叫びながら。

「ふふ、誰かの温もりを感じるなんて、何十年ぶりかしら」

耳元で、鈴のようにコロコロと転がる声音。抱き締めた感触は、ひどく柔らか　人間とは思えないほど　柔らかか。

「それから、エリーシャちゃんも」

「　はい」

慌てふためく僕とは違って、落ち着き払ったエリーシャの声。

「今まで友達になってくれてありがとう。貴女のお蔭で寂しさが紛れたわ。」

貴女も……引け目や負い目なんて感じる事などないのだから……幸せに、なつてね」

エリーシャからの答えは無い。それでも、耳にかかる吐息は楽しみに。

「生まれる前から好きだった人と、ちゃんと幸せにならないとダ

メよ」

「お、お婆様!？」

「お願いね、おにーちゃん」

「あか、り!？」

最後は舌つ足らずな幼い声で、妹を思わせる、妹にそっくりな声^{アカリ}で

ヒカリさんは、消失した。

腕の中の感触が消える。存在が失われる。全てが消えて残ったのは……ただ壹枚の羽。

(ああ、これで私の『御役目』も終わる)

痛いほど悲しい声が、耳に寄らず鼓膜によらず、直接脳に語りかける。

(みんな………幸せにね………)

第二章 11

「なん、で？」

掌に残った羽を呆然と見続けながら混乱した頭で、何も考える事もできず、跪いて呟く。

「ヒカリさんは、もう何十年も前に死んでいます」

「し……死？」

「死して後ただ一人幽体となってこの場に留まり守り続けた。時を重ね歳を重ねながら」

エリーシャは僕に背中を向けている。

「生まれ落ちて一度も外に出る事無く、死して後も一度も離れる事無く、この防人として過ごした人……それが、ヤグチ・ヒカリお婆さま」

彼女の体温を感じるには遠く、されども彼女の甘い香りが届く位には、近い。

「彼女の生命全てをかけて、コウキ君の神威兵器をガモンハイドに悟られない為の結界を張っていた……それが、ヒカリお婆さまの『御役目』」

「それ、だけ……の為に？」

「それだけの為に、僅か十歳のこどもが此処で自決し、自らの命を犠牲にして封印を張り……以後半世紀以上、此処で寂しく唯一人」

「……」
エリーシャの言葉が染み込むまでには、時間を要した。ヒカリさんの言葉を飲み込むまでに時間が必要だった。血を分けた人の消滅はあまりにも突然過ぎて、理解が追いつかなかった。

「コウキ君、ヒカリさんが生涯かけて護ったものを……受け取りましょう」

エリーシャの優しい声を契機に、鳥類絶滅回避研究所は様相を変え始めた。

「あ」

螢火灯り、陽炎立ち昇り、幽玄定かならぬ幻灯充滿する。
今では闇の底は闇ならず、螺旋階段の底から遙か高くまで、弱弱しくも儚き光満ち溢れ、

「ああ」

されども光は何かに遮られる。何か？何かってなんだ？目を凝らして何かを見つめる。

ふわり、フワリ、はらり、ハラリ、

何かが分かる。それは螺旋階段の遍く全ての絶滅回避実験鳥籠から放たれた、鳥の羽。

ふわり、ハラリ、ひらり、ヒラリ、

風を切って踊り、風に乗って舞う、視界を埋め尽くす鳥の羽。

黒羽白羽赤羽、尾羽風切り羽冠羽、羽毛綿毛、雀の羽燕の羽鷹の羽、啄木鳥の羽四十雀の羽白鳥の羽、身近にいる鳥の羽、山間に潜む鳥の羽、木立に止まる鳥の羽、魚をとる水鳥の羽、命を奪う猛禽の羽、何万キロも飛び続けられる渡り鳥の羽……

羽、はね、ハネ……これほど多くの命が産まれ、育ち、老いさらばえ、失われ……そして遺された鳥羽^{こは}。

「コウキ君の神威兵器は、コウキ君の力だけで存在するものではありません」

涙が出た。知らぬ間に、流れ落ちた。

命は産まれ、育まれ、生き抜いた後、次代へと受け継がれて、そして消える。僅かな形見だけを残して。

「ここで生まれ、育まれ、新たな生を産み、そして儚く散った、または敢え無く滅びた鳥たちの命の欠片。それが貴方の助力となる源」

胸ポケットの写真へと掌を重ねる。

僕の残したもの、彼女の遺したもの。

託されたその想い、受け取ったこの想い。

掌に乗せられた羽を弱く柔らかに包み込む。

「アカリ様が作られ遺志を託し、ヒカリ様が思いを継がれて護り続けた力」

命は繋がる、繋がっている。容易く断ち切られもし、しぶとく続きもする命の連なりに、

「この百年で滅びた鳥たちの力全てが……コウキ君の力となります」
雪の様に降り積もる鳥羽、既に足首にまで達するほどに。積みあがる命の欠片に

感謝を

そして誓いを。

第二章 12

エリーシャが耳打ちする。

僕が、この想いを力に変える為の、呪文を。

長く長く止む事無く居ることなく舞い降りる風と空の申し子たちの欠片に、手を伸ばす。空なんて見えないけれど、青空を力強く羽ばたく為に、翼なきこの身の為に、

「舞風
まつかぜ」

今は、その力を、借りよう。

口をつくのは、エリーシャに教わった呪文。

「
はちよう
八葉！」

風が起る。

舞い降りていた羽が自ら動き羽ばたき、風を起こしている。底を埋め尽くした鳥羽が、再び空へと舞い上がる。頂上を舞い遊んでいた鳥羽が、僕へ向けて急降下を始める。

僕の呪文に、呼応するように、

既に亡び滅びた命が、再び
かりそめ
仮初ではあるけれど 命
よつるきことう
四剣四刀の有韌翼
ゆうじんよく
神威兵器『鵝臨射』とし
がりんしゃ

て、やがて始まる聖戦の供として介添え人として。

バサリ、ばさり、

強い強い翼の羽ばたき音。それは天空を縄張りとする猛き猛禽の翼。虚空を裂いて現れたのは、雄々しく猛き鷲一羽。最初の鷲に続いて次々と鷹^{たか}、隼^{はやぶさ}、鳶^{とび}が右手に爪を立てて僕の右手を「宿木」としていく。

反対に左手の方には燕、雀、鶇^{つぐみ}、鶇^{ひよどり}が止まり軽やかに囀る。重くて痛い右手の猛禽と違ってこちらは可愛らしい。

重い右手と軽い左手、だけど命の重さに変わりは無い。

鳥たちが一斉に僕から離れる。

八羽の鳥、仲良く飛び立つ。

猛禽も小鳥も関係なく。今は滅びたはずの鳥たちが、仲良く、楽しげに、歌いながら。

これが、護ったもの。

アカリが遺したもの、ヒカリさんが守ったもの

僕の為に、

世界の為に、人類の為に
命を懸けて、命を費やして、命を
捨てて。

第二章 13

「この仔達があなただの『武器』となります」

「この……鳥が？」

「ええ、真名を呼べば本来の姿に戻ります」

「まな？」

「この仔たちの真の姿……刀剣の名を呼ぶ事で、本来の形に戻ります」

エリーシャから鵠臨射それぞれの真名を教わる。

「舞風・朧おぼろ 月山貞光！」

鳶が右手に勢いよく飛び込んで姿を変える。緩く湾曲した鋭い刀に。

「舞風・霞かすみ 七曜剣！」

燕が左手に勢いよく飛び込んで姿を変える。真つ直ぐ伸びた剣に。

総毛立つほどに美しい、冴え冴えとした刃物の光。

暫し見惚れる、危険な芸術の様式美に。

理解する、この右腕の刀の名は『月山貞光』、鳶の本来の姿である。と。この左腕の剣の名は『七曜剣』、燕の本来の姿であると。

世界の終焉おわりを夢見し時に、我が掌中に在りし刃そのもの。

「右手に刀、左手に剣を持ち、残りの六匹があなたの援護をする……それがコウキ君の神呪天討流殺神剣です」

しばし、無心で刃に魅入る。

実用の美と様式の美が矛盾する事無く融合した世界で最も稀有な芸術……日本の刀剣。その極致のうち二つまでをも手にしているのだ。されども、これは凶器。容易く命を奪う凶事の種。心奪われてはならぬもの。

「放せば、鳥の姿に戻りますよ」

刀と剣を手放すと……ぽん、という軽い破裂音とともにまた二羽の鳥に戻った。

刀『月山貞光』から変化した鳶と、剣『七曜剣』から変化した雀

が風を切って体育館の中を舞い踊る。それにつられて残りの六匹も同じようにくるくる、くるくると舞い踊る。

右手に止まった猛禽達は日本刀に変化した。

鷹の『安綱』は、酒吞童子を切り捨てたという、天下五剣の一つ『童子切安綱』に。

鷲の『長幸』は、最も人を良く切れるとお墨付きのついた最上大業物『多々良長幸』に。

隼の『兼定』は、幕末の京から遙か蝦夷のまで土道を貫いた男の愛刀『和泉守兼定』に。

鳶の『貞光』は、月の鉄で初めて作られた現代刀の逸品『月山貞光』に。

左手に集う小鳥は、剣へと変わる。

燕の『セイ』は、表裏に天文の運行を表す金象嵌を施された聖徳太子の御剣『七星剣』に。

雀の『ヨウ』は、自然の摂理を刃に刻み込まれたる宝剣『七曜剣』に。

鶇の『スイ』は、聖武天皇の御剣と伝えられる神剣『水龍剣』に。

鶇の『タマ』は、布津主の化身として二千年以上も祭られた七尺五寸もの超長剣『& amp; #38900;御霊剣』に。

合わせて八振り、四剣四刀。

これが『剣聖』ヤグチ・コウキの愛刀愛剣たち。

歴史に名を残す名刀、数多の侍が武士の魂として求めた業物、退魔の神の威容を体言する為の神剣、何千年と破邪顕正にと祭り上げられたる聖剣……何れも劣らぬ霊威を誇る。

「右手に刀、左手に剣を持ち、残り六匹の鵺臨射があなたの援護をする…それがコウキ君の神呪天討流殺神剣です」

最後に鵺臨射達は一斉高く啼いて、霞のように掻き消えた。

初めからいなかったように忽然と、賑やかだった螺旋階段はまた寂寥。

だけどそれは当然、あの八羽の鵺臨射はもう滅びた絶滅動物。

死んでしまったら忘れられる。

もはやこの月には、あの八羽の姿も名前も鳴き声も、知らないこと
もたちのほうが多いのだと………気付いて、寂しくなった。

そして、この『僕』も。

全てが終われば消える………そして忘れられる。

それはそれは悲しい事だろうけど、

それもまた

一つの、摂理、ではないかと

思うことにしよう。

そのかわり生きている間は存在している間は、がむしゃらにひたむ
きにやってみようと覚悟を決めて

空を、

ここにはない空のどこかにいるであろうアカリとヒカリさんと数多
の亡霊たちへ、手を繋げるように手を伸ばして、黙祷した、

「……………ありがとう」

小さく、呟きながら。

第二章 14

「見つけた」

その声は幼く、

「見つけた、見つけた、見つけた」

その声は甲高く、

「あはははははは、やっとやっとやっとあのクソババアも死んだのか。いい気味だいい気味だ」

そして、その声は耳障りな罵倒だった。

「!？」

「何奴！」

即座に戦闘態勢へとエリーシャは移行する。僕を庇うように立ち、白銀の槍シュベルトライテを呼び出し構えて。

臓腑はらわたを捩繰り回す様な暴言の主は、落ちてきた降りてきた、螺旋階段の頂点てっぺんから底の底まで、一直線に。

沸騰して煮えたぎっていた血が、一瞬で底冷えした。

「はじめまして、御先祖様」

「あ……あ………？」

狼狽うろたたえる僕とエリーシャ、ソイツの異様さに、ソイツの奇妙さに。

「あなたの妹、アカリの子孫オフスプリングにあたります」

其の目、其の口、其の顔、其の体 身体全部位全パーツ、その尽くが、似ている、似通っている、似すぎている！

「逢いたかったよ御先祖様、殺すために」

逢いたかったよ御先祖様、奪うために」

誰に？誰に似てるかって？それは………

「あなた………だれ？」

エリーシャの声は震えている。問い質すことを恐れている。同質にして異質なるものを恐れて。

「名は 『コウキ』」

「 な、に？」

それは、似ていた、この

『ヤグチ・コウキ
僕』に。

「姓は『ヤグチ』」

いいや、似ているけど、違う。

「異名は『剣聖』」

そいつは、ニヤリと、晒う、口の端だけで。僕が決してやらない晒い方で。

「この俺こそが真正正銘の『剣聖』ヤグチ・コウキだと言ったら…

……さあ、どうする御先祖様？」

第二章 15

「この俺こそが正真正銘の『剣聖』ヤグチ・コウキだと言ったら……さあ、どうする御先祖様？」

『ただの高校生の僕』とは明らかに違う、『剣聖』を名乗るもう一人のヤグチ・コウキ。

テレビに流れていた、宣伝広告として喧伝していた、そのままの姿で ソイツは我こそが救世主と嘯いた。

ギリギリと頭の片隅で痛みが走る。

「ほん、もの……？ 正真正銘……？」

ピリピリと粟立つ肌。

「じゃあ……この僕は……なんなの？」

「クハハ、少なくとも女に化けてコソコソしてるような腑抜けには『剣聖』は名乗れまいなあ。

御先祖様が復活する前からずっと、復活した後からずっと、君達の動向は全て把握している。

いや、流石に一瞬で宇宙に行かれた時だけはケムに巻かれたけどね。それから、いきなり女装して現れた時もさ」

「世迷言を！」

腰から力が抜けかけた僕の隣で、エリーシャが怒鳴る。

「この私が！ このエリーシャ・バルカが復活を執り行ったこのコウキ君を差し置いて！

如何なる者が『剣聖』ヤグチ・コウキを名乗り上げる！？

事と次第によつては只では帰さん！」

キツと眉根を吊り上げて、槍の切っ先を少年に向けるエリーシャ。勇ましくも美しいその姿を、しかし『剣聖』は鼻で晒つて、

「カリカリすんなよ『失敗作』のエリーシャちゃんよ。あんたが半端者だから、御先祖様も満足に復活できなかったんだろうが！」

「……！？」

息を呑む、絶句する、息が止まる そんな気配。

「キサマー!!」

怒気を露わにして、手にした槍を投擲した。

轟音かなぐり上げ空気の壁を破り一直線に『剣聖』の心臓を貫かんと! されども

「おーおー、怖い怖い」

軽く、蠅を払うかの如く……………それだけで『剣聖』は片手で槍を碎き壊した。

「女の相手は女にさせたほうがよさそうだ。
でておいでよ 」

『剣聖』は大げさな身振りで呼ぶ、誰かを。

「出ておいでよ 『デイド』……………」

第二章 16

「出ておいでよ」

『デイド』

え？

刹那、時間が凍った。僕らの心臓が、呼吸が……生命が。

「うん、わかった、二つき」……

確かに、夢で、聞いた、そのままの、声。

音もなく、気配すら滲ませず、薄っぺらい闇の影からソロリと這い出た女。それは……

「え？え？え？ええ！？」

世界に、新たな色加わる。

先ず、
黄金。

それは陽の光を受けて豪華に輝く、癖の無いまっすぐな彼女の髪の色。

次に、純白。

それは絹よりも滑らかで、肌理きめの細かい彼女の肌の色。そして、青。

僕の好きな空の青と同じく優しい青は彼女の瞳の色。

黄金・純白・青……それが、彼女を構成する三大色素。鮮烈なその色素が、僕の視界に焼き付けられる。

それは確かに、デイド、夢の中の女、
デイド デイド・バルカ
神仙女王！

「なな！」

混乱どころではなく、錯乱の一步手前まで乱れた意識は暴走寸前。

「うっき……うっき？ あれ？ うっきがふたりもいる……？」

夢の中の女に良く似た謎の女も、僕と『剣聖』をみて少々混乱したようだが、

「あは、こうきがふたり…たのしー…」

知性の欠片も感じられない、幼い物言い、あっさりとアリエナ

イ現象を肯定した。

「なん……………なんだよ……………おまえら」

同質であり異質である目前の二人に眼を鋭くする。

「ほら、デイドも御先祖様に挨拶しなよ」

「うん……………わたし……………デイド・バルカ……………」

ゆっくりと首を大きく傾げて、

「はじめ、まし？あれ、どうして、わたしこうきに、あいさつ……………するのかな、かな？」

「いいんだよ、デイド。初めましてで」

姿形は夢の中の人に酷似した、けれども知性を感じられない幼児のような物言いが異常差を際立たせる。

「じゃあ……………はじめまして……………あは、あたらしいこうきも……………かあい」

よくよく見れば視るほど目立つ差異。

輝きながらも、くすんだ黄金の髪。

まるで死化粧の様にのっぺりとした純白肌。

瞳孔の開いた、焦点の定まらぬ青い瞳。

竄れ果て瘦せた頬は、むしろ成熟した大人の妖しい色香を増加させてみせる。

エリーシャとは真逆の、デイドの模倣人形。

第二章 17

エリーシャとは真逆の、ディドの模倣人形。

その薬物中毒者のような目に見つめられると、寒気が走る。

「ランツクネヒト、か。悪趣味な扮装をしてくれますね。

コウキ君、下がってください」

「らんつく、ねひと？」

「恥知らずにもミゼリコルディア側に付いて自己の保身に走った裏切り者、造反分子。ランツクネヒト 私たち人類を絶滅へ追いやろうとする、明確な敵対組織ですよ」

裏切り者、と聞いて、僕の心音が乱れる。

「そんな、どうして……ミゼリコルディアは人類の敵なんでしょう。どうして、そんな奴らにいたり……」

「だってさ、もう人類に勝ち目なんてどこにもないじゃん」

明確で明瞭な答えに、息が止まる。

「何？あんたら勝てる気でいたの！？」

あの（・・）ガモンハイド様に！あの（・・）腐敗王様に！
其処の！

中途半端な！

『神呪天討流の使えない御先祖様』が！

一体どうやったら勝てるというんだ！」

「コウキ君、こんな輩の狂言に付き合っではいけません。この叛乱ランツクネヒト分子は、金や保身の為に誇りをミゼリコルディアへ売り払った下郎ども。嘗ての絶滅戦争でも底の浅い欲望の為に、このような輩は掃いて捨てるほど現れました」

再び立ち上がったエリーシャ。

「裏切り結構、卑怯も上等、勝つ方に着くのが当たり前だろ？なあ」
「うんうんそうそう」

『剣聖』が同意を求めると、最も外見年齢の高いデイドが、最も精神年齢の幼そうな声で返答した。コクコク頷きながら。

「コウキ君は必ず力を取り戻す。そして貴方たち紛い物ごとき、即座に打ち倒してくれよう！ミゼリコルディアに魂を売った裏切り者どもめ、己が腐った性根を悔いるがいい！」

ボロボロになった体に鞭打つエリーシャを嘲笑って『剣聖』は手をヒラヒラと泳がせる。

「あー、ムダムダ。そんな努力や根性でどうにかなる類いの話じゃないからさ」

「だって、御先祖様の『技』を盗んだの、俺だから」

「……………な、に」

「

エリーシャが絶句する。僕も呼吸を止める。半分停止していた心臓音を聞きながら。

「御先祖様が『剣聖』として闘った全ての戦闘データと、鍛錬で身に付いた全ての殺人技術に殺神技巧。それら全部をひつくるめた『技』の全てを……………御先祖様本人の魂魄から分割ダウンロードしたの、俺なんだから。」

御先祖様の『剣聖』として必要な部分を根こそぎ盗んで出来たのが、この「

「そんな……………そんな……………」

「この俺様『剣聖』ヤグチ・コウキってわけよ」

第二章 18

「そんな……事……」

「だから御先祖様に戦闘力がないのは当然。なんせ心技体の『技』がそっくり抜けているんだから」

「そんな……」

「神呪天討流の技全てを、俺が転生継承した。基本技の『舞風』から対空攻撃『花天』、対地攻撃『豺狼』、斬首攻撃『蓮香』、敵味方選別超広範囲攻撃『八極光舞無影斬』、その他色々、神呪天討流のほぼ全ての技を俺は行使できる」

ふうつと肩を竦める『剣聖』。

「残念ながら、廃兵じゃない俺には咒力を一億も溜め込めないから能力全般で劣る上に、御先祖様固有能力『加速』は俺には備わらず、奥義『光竜真剣』は使えないがな」

そういつて晒う、僕と同じ顔の『剣聖』。

「失敗作ちゃんもさ、失敗作になるのは当然なんだよ。だって、こちのデイドがオリジナル・デイドの『魔力』の九割がた盗んでるんだからさ」

「なん……ですって……」

「ああ、絡繰りに気付いたかい失敗作ちゃんよ」

『剣聖』はエリーシャを晒い、磔にされた聖者のように両手を広げて、

「俺達もまた失敗作ちゃんと同じ

転生体

だからな」

「嘘だ！」

エリーシャは声を張り上げる。

「私以外………転生実験体一万人の内、私以外誰一人として生き残ったことはいない………あの悪夢の実験を生き延びた私以外に、

転生体は………いるはずがない！」

「それがさあ、いるじゃないか。ホラもうひとり此処に。あんたの姉貴………いや、母親になるのか？んん？遺伝子的には双子といふべきか、魂的には同一存在といふべきか………ああ、もうよくわからんなあ」

ガシガシと頭を乱暴に掻いて、

「とにかく、失敗作ちゃんの一つ前にデイド転生実験を強行した、成功した、失敗した………そして暴走して逃走したヤツがさあ」

クククと含み笑いを浮かべる『剣聖』に、脳裏に黄泉返るは、円卓会議での会話、

「まさか………真逆………リプシマ！？」

「はい、御名答」

叫ぶエリーシャ、晒う『剣聖』

「りぷしま………りぷしま………？だれ、それ………わたしは………でい………ど………」

『実験を強行して尊い人命を失った』そう言っていたハスドルバルを思い出す。

「うっうっ………あたま、いたた、いたい………いたい………かんがえ、た、く、な、い」

むずがる赤子のように蹲る『デイド』。

「御覧の通りデイド………リプシマは心が壊れちゃった。オリジナル・デイドの魔力の大半を転生継承したはいいが、無理な転生強行が祟って………」

頭の上で指をクルクルと回して『剣聖』は晒う。

「分かったかい御先祖様よ。」

此処にいる俺様もリプシマ（デイド）もある意味本物であり、偽者であり、真贋付け難いもんなんだよ。御先祖様や失敗作ちゃんと同じでさ。

みんな等しく失敗作で、出来損ないで

役立たずだ」

「ええい、虫唾が走る………」

苛立ちを隠しもせず、にエリーシャは吠えた。

「その顔で！その声で！私を！私のコウキ君を……………侮辱するなあ
！」

第二章 19

「クハハ喚かないでよ失敗作ちゃんよ。あんたと違ってデイドの聖名を継承した正真正銘のリプシマ（デイド）に敬意を払えってんだ」

「あなたは…きらい…こうきは…わたしの」

むっとふくれたリプシマ（デイド）はエリーシャを睨み

「……………いでいじーぶあるきゅーれ」

「……………！？」

ただ一つの言霊だけで、虚空に浮かぶ九つの神威兵器。体温が氷点下を一気に下回る。

「『東方より来たれ風神』！！コウキ君！」

「うん、わわわわ！！」

エリーシャの飛翔魔術で僕らは全力で回避行動をとる（といっても僕はエリーシャに抱きついてるだけだ）。刹那

「……………ぜんだんはっしや（ふぁいえる＝ふらい）」

炸裂！炸裂！炸裂！

貫通！貫通！貫通！

破壊！破壊！破壊！

「うっうっうわわわあああああ！？」

『九人の怒れる戦乙女』^{イディジー・ヴァルキューレ}が、数時間前にエリーシャが使った同じ

魔術が、前回を遥かに上回る規模で、全てを薙ぎ払った。

「う、うわあああ！」

「きゃあああああああ！！」

崩れる螺旋回廊、壊れる絶滅回避研究所、魔術の余波は瓦礫混じりの暴風となって僕らに叩きつけられ、吹き飛ばされる。

圧倒的な 魔力。

壁に衝突した痛みより、エリーシャよりも強い魔力の持ち主に心が痛む。

「あららら、リップシマ（デイド）ってば勝手に始めちゃって…まあいいや、俺も混ざらせてもらうよ」

耳にしたのはまたしても聞きたくない呪文。

「舞風」

一陣の風と風の隙間から、それは生まれる。全身から血の気が引くほどの冷めた刃が。

第二章 20

「舞風」

一陣の風と風の隙間から、それは生まれる。全身から血の気が引くほどの冷めた刃が。

「万葉！」

「ヒイ!？」

それは、正しく『雨』としか言いようのない刃の洪水だった。

「『東方より（スト）、来た（リ）……れ風神^{ボーグ}』!！」

苦しい息を吐き出して再び紡ぐ飛翔魔術。一瞬で僕は螺旋階段を頂上へ　しかし

「キャ………アアアアアアアア!」

「ウワ、アアアアアアアアアアアア!？」

怒濤の剣刃は弾幕網羅となって逃げ場の全てを覆い尽くす。エリィシャの必死の回避運動も防御魔術も全く役に立たず、

「哀れ小鳥は真逆様^{まっさかさま}つと」

嘲笑う声を聞きながら、僕はもんどりうって螺旋階段の底の底に倒れた。

「か………はあ………」

本当ならスプラッタ即死の高さだが、エリィシャの魔術が残っていたお陰で軽減され致命傷は免れたらしい。それでも、痛烈な打撲で体内の空気という空気が全て吐き出され酸欠間近。

「!つ、ウウ、ギアアアアアアアアアアアアアアアアア!」

「クハハハハ、痛い?痛い?痛いか御先祖様!?!どうだい俺様流『舞風・万葉』は!」

かてて加えて、手に足に肩口にざっくりと刺さった刃物の激痛。

アア、全く、痛覚があるのを呪うほどに痛い、イタイ、痛すぎる!

「御先祖様が復活するまで『鵝臨射』は絶対封印・完全秘匿で手が

出せなかったからさ。代用品で我慢してたんだよ。

一日一日何本も何本も刃物を体に突き刺して取り込んで飲み込んで……痛くて痛くて気が狂いそうだったさ」

のたうつ僕に哄笑をあげ近寄る『剣聖』。

「それもこれも全て全て全て！あのババアが『鵝臨射』を隠しやがったからだ！『鵝臨射』さえ手に入ればあんなにもイテエ思いをせずに済んだものをさあ！！」

「ガ！？！！」

あまりの痛みに、最早言葉すら出ない。

『剣聖』が僕を足蹴にする。肩口に刺さった短剣の柄を踏みしめて、筋組織を突き破り、骨を砕いて更に奥へと捻じ込んで！

「だから御先祖様！！アンタもたつぷり味わってくれよお、俺様と同じ、刃物が肉を切り骨を削り血を噴き出させ痛覚神経を引き千切る痛みと苦しみて奴をサア！」

第二章 21

「汚い足で コウキ君を苛めるな下郎！」

「おっと」

飛び掛るエリーシャを『剣聖』は軽く躲^{かわ}し、

「キャウー?」

カウンターで軽く腹を蹴り飛ばす。小柄なエリーシャは硬い床をバウンドし、倒れて動かなくなる。

「や、め…エリーシャを…傷つけ、ないで」

「バーカ、自分の身を心配しろってんだ」

「アガ、ギ、ヒイ!!」

笑顔で『剣聖』は僕への加虐を強めるサド侯爵の愉悦に浸った顔で。

「あは……………ないてるこうきも……………なかせてるこうきも……………か
あいい」

いつの間にか傍でしゃがみ込み、僕を見て微笑むリップシマ（デイド）。僕の血の飛沫を顔に受けて髪に受けて、それでも柔らかに微笑む 僕が苦しむ様をみて、可愛いと。

硝子玉のように無機質なリップシマ（デイド）の瞳の中で、僕が叫んでいる。痛み^に仰け反る、苦しみに震えている。

停電したように一瞬視界が暗黒に落ち、刹那に痛みでまた光が戻る。

数度その行為が繰り返されて初めて、自分が痛み^に耐えかねてショック死になり、死ぬたびに体内咒力の作用で蘇生している事に気付いた。

気付いた所で抗う事もできずに、死と蘇生を繰り返される。

叫んで叫んで叫んで、痛み^に耐えかねて死んで、生き返って、また死んで……………

「ハッ！死にたくても死ねねえだろ。なんせ勝手に傷が再生しちま

うからなあ」

刃が力任せに引き抜かれ、露わになった傷口から、血が吹き出る、ビュウビュウと音を立てて、憤水のように吹き出る血。

朦朧とした意識の中で赭に染まるデイド。

「かあい……えへへ……こうきの……おいし……」

僕の血を舐めとつて、口元を汚したまま陶醉しきつた顔。幼稚さと残酷さが分けないまま、体だけが大人になったかのような歪さで僕の公開解体ショーを愉しんでいた。

やがて、それにも飽いたのか疲れたのか、地獄の拷問も終わり……

……『剣聖』に髪を掴まれ、顎を掴まれ、口を開かされ、

「ん……んぶ!？」

息が出来ない、抵抗も出来ない、ただされるがままに、口内を蹂躪される。上から、荒々しく口内を吸われる。

「あはは、こうきとこうきでキスしてるー」

口唇を、奪われた。

第二章 22

口唇を、奪われた。

想像も付かなかった行為に体が緊張する。

荒々しい舌使いで僕の口の中の血が舐め取られる。

「コウキ、君!？」

「んー、じゃましちゃだめー」

(や、やめ………て、よお)

エリーシャが助けに来て(リップシマ(デイド)に止められているが)ようやく抵抗する意思が生まれて、ジタバタと足掻く。が、『剣聖』は僕の体を締め上げて放そうとしない。

と、痙攣する右手から、

(あつ、だめ、ダメ)

根こそぎ力が奪われていく感覚。百年掛けて守り続けられ、そして、ついさっき、僕の元へ帰ってきた力が、奪われていく感覚。

(いや、だ。やだー………!)

「んあ!？」

力任せに動いて、ようやく『剣聖』を突き飛ばした。

「~~~~~っ!!」

手の甲で自分の口唇をゴシゴシして、『剣聖』を睨みつける。

「クハハハハハ、貰った貰った貰ってやったぜ鵝臨射をよお!ババアたちが百年かけて守った鵝臨射をなあ!」

『剣聖』の方は僕の事などお構いなく

「舞風・八葉……来い鵝臨射どもよ!」

試し切りを、始めた。

バサリ、バサリと翼の音、しかしそれは福音でなく、

「!やめてー………!」

無差別に大規模に、喉が裂けんばかりに張り上げたエリーシャの声が、蚊の鳴くようにしか聞こえないほど、『剣聖』の手に渡った

鵠臨射は全てを切り裂き始めた。

壊れる壊れる螺旋回廊実験鳥籠。

ピーピーギヤアギヤアガーガーキーキー。

小さく大きく強く弱く、種々様々な……断末魔。それは百年を守られた絶滅危惧種達の……断末魔。

飛び散ってくる血、羽、肉片、卵の残骸。

「ちっ、まだ半分だけか。いまわの際じゃねえと吸い取れねーって面倒だな」

「そ、んな……」

鵠臨射が……鵠臨射の半分、刀に変わる猛禽四羽が……奪われてしまった。

アカリが、ヒカリさんが……守ってくれた……鵠臨射が……

第二章 23

「御先祖様よ、取引だ」

「あ……………あ？」

最早抗う力も痛みにも喚く体力すら無くなったところで『剣聖』が加虐の手を緩める。

差し出したのは、一本の短剣。

柄口には宝石が散りばめられた西洋貴族が儀礼用に持つような、煌びやかな短剣。魂が吸い取られそうなほどの、輝き。

「自分の意思でコイツを腹に突き刺したら再生能力が作動しないように術が掛けてある」

「……………御先祖様が自害切腹すりゃ、百万の人間は生き残れる」

「え？」

呆けた答えを返す僕に『剣聖』は笑いかける。晒うのではなく、優しく、笑う。

「今のままでは人類の絶滅は避けられない。けれど御先祖様が死ねば、自ら命を絶ち、人類に最早ミゼリコルディアへの全ての抵抗力が無くなった事を示せば……………」

そう、エリーシャが作った政府広告の中の『剣聖』のように、優しく、やさしく、一目で見えるものを魅了するように。

「『腐敗王』ガモンハイド様は力無く惨めな人間ごときが月の片隅、暗闇の穴底で細々と生きていくぐらい黙認してくださる」

「じが、い…せつぷく……………？そんな……………」

「なあに戦国日本ならどこでもやってた事だぜ。主家が天晴れ至極な割腹姿を見せる事で一族郎党部下家臣一門衆まとめてそっくり生命保障の本領安堵ってな。」

そしたら俺達ランツクネヒトがこの箱舟を取り仕切って、平和に

ウトナビシユテム

話が終わるわけよ」

笑いが、再び晒いへと変わる。

「……………尤も、あんたがここで死ななけりや封印を破ったガモンハイド様が直々に手を下す事になる。そうなりや、情け容赦なく皆殺しだ。なんせ、御先祖様に戦闘能力も殺神能力も無いんだからな」

辛辣という文字を顔に書いたような表情で、

「さあどうする御先祖様、今すぐみんな纏めて絶滅するか、それとも慈悲深く最後の時間をくれてやるかの二択だ」

答えを迫る『剣聖』

第二章 24

「それでも、御先祖様とトコトン相性の悪い『腐敗王』ガモンハイ
ド様としては、万に一つの敗北要因すらも消し去っておきたい……
……だから、百万回やつても勝つ可能性の無い、『神呪天討流抜きの
御先祖様』にまでこうやって取引するのさ……さて、御先祖様？
切腹の覚悟はできましたかね？」

答えない僕に無理矢理先ほどの短剣を握らせる『剣聖』。

「……………」
渡された短剣。意外に肉厚で、これなら良く切れるだろう、僕の
命を絶つくらいには。

「……………」
魅入る、短剣の刃に。魅入られる、短剣の刃に写った、己が虚ろ
な瞳に。

「……………」
「ぼくが、死ねば」
鏡のような刃に写った僕に、問いかける。

「……………」
「百万人は、救われるんだ」

「ああ、その通り」
声がして、顔を上げる。そこに居るのは、僕と同じ顔の『剣聖』。
「百万人の命を確実に救うか、一億人全員一気に滅びるかのどっち
か、だよ」

また、晒いが消える。諭すような、あやすような、優しい声で。
「安心しな御先祖様、戦争に負けるのはあんた一人の所為じゃねえ。
この月にいる全員が敗北要因だ」

（込み上げる吐き気とぐるぐると回る視界）
僕の罪悪感を解きほぐすような優しい声は、

「『失われた六十年』……………戦争を先延ばし先延ばしにして、強行
に戦争準備を進めるハズドルバル爺を更迭投獄してまで、ただ我が
代の春を謳歌し、貴重な物資と時間を浪費した時代：勝てる機会を

逃して怠惰な平和を貪った世代」

（眼に映る首の& a m p ; # 2 5 4 4 5・げた剥製）

そのまま、民衆への怨嗟と変わる。

「最後の最後、末期も末期になつてから、二十年前にハスドルバル爺を復職させて、『自分達の義務を果たせ』と押し付けたんだ。極めて民主的な取り決めによつてな」

（眼に映る瓦礫の下で潰れた卵）

「そのツケを今更払わされてるんだ。六十年分の莫大な利子付きでよ」

第二章 25

ぴび、ぴびぴとどこかで雛の鳴き声。

「あんたが復活される遙かに前から箱舟内部は血塗れだった…勝敗はとつくに決まっていたんだよ」

「ただ親鳥の鳴き声は聞こえない。」

（……………ああ）

瓦礫に体を潰されて……………息絶えていた。

「分かるか御先祖様？あんたが闘えないのも、俺様みたいな紛い物が現れるのも、ランツクネヒトが付け入る隙を作ったのも、全てが民衆の自業自得よ」

死んだ親鳥に、死を理解できない雛鳥が擦り寄る。金糸雀の黄色い羽が、向日葵ひまわりのように黄色い羽が、檸檬れもんのように黄色い羽が……………舞い散っていた。

「全てが、遅すぎちまったんだ」

「そう、おそすぎたの……………おそすぎたの」

遅すぎ……………言葉が僕の胸で反復する。そう、全ては遅すぎた。

何もかも、全てが、遅すぎたんだ。

「そうかあ……………遅すぎたんだあ」

『剣聖』の差し出す短剣を左手で受け取る。

「だ・め……………ヤメテエ！コウキ君！」

「ハッ！喚くなよ失敗作ちゃんよお。せつかく御先祖様が決断したんだからその意思を尊重しろよなあ！」

ヒラヒラと舞い散る金糸雀の鳥羽が、導かれるように、

「……………遅すぎることなんて

何一つないよ」

まるで意思があるかのように、僕の右手へ。

「こうき………？」

「コウキ、君？」

「……………御先祖、様？」

三人とも、僕を驚いた目で見ている。

「何も、遅すぎる、ことなんて……………ない」

金糸雀の鳥羽が、決心を促してくれた。

心臓の中で化膿していた腫物が急に潰れたような、ああした魅^{まよわ}しから、妖力から、悪魔の誘惑から解放されたような……………そんな気分。どん底まで落ちた気分は、一気に吹っ切れた。自ら口にすることで、誰かに押し付けられた言葉でなく、自分の言葉を発することです。

「舞風」

右手の黄色鳥羽に込められた意思を感じ取り、起動呪文^{マジックワード}を解読。

「忘歌^{ぼっか}」

金糸雀の鳥羽が変化する。

「五本目の刀！知らねーぞ、そんなもの！」

戦闘態勢に移ろうとする『剣聖』に

「もちろん、知るわけがないでしょうね。」

だって、今、作られたのだから」

頬に掛かる水痕一筋拭いもせずに、エリーシャが突きかかる。『

剣聖』の動きが邪魔される。

「もしも何かの理由で鵝臨射^{リザーフ}を失った時の為に、私とヒカリさんで用意しておいたのよ。」

鵝臨射・予備^{リザーフ}をね！」

「ケツ、魔力が無くなっても流石は稀代の魔術師^{ツァウバラー}デイド・バルカの転生^{サンサーラ}体^サってことか」

込められたのは『こどもたちをまもって』 いつの世も如何なる生き物も母が思うことは同じ。

真名を呼ぶ事で、真の姿を取り戻す。

「すいしんしまさひで
水心子正秀！」

金糸雀の羽は、変わる、無骨な、日本刀に。

「ッ！舐めんな！」

「クツ、ツウ！？」

瞬時に攻防は入れ替わって、『剣聖』の卓抜した剣技に防戦一方となるエリーシャ。

ギイン、と大きく槍をはねあげて、

「テメエは後でたっぷり相手してやるから、」

無防備となったエリーシャの腹部に、

「俺達の間割り込んでくるんじゃない！」

横薙ぎに大きく『剣聖』の刃が

「そうは、いかない」

ギイイイイイイイイイイ

受け止めた刃から全身に伝わる衝撃、腰を落とし足を踏ん張って、耐える。

「！！！？」

僕の目の前で『剣聖』が目を丸くしている。

「
コウキ君」

僕の真後ろで、エリーシャの声が聞こえる。

一瞬で、倒れていた地点から十メートル離れた二人の間に割って入った。

「チッ！これが御先祖様の『加速』か！」

「そつだよ、僕の能力は……『加速』だ」

『剣聖』の視線を真っ向から受け止める。

「この世界に、必要な力だ」

罅迫り合いを続けながら、言葉が続ける。

「僕はどんな遅れからでも挽回してみせる」
右手には水心子正秀。

「時間が止まっているなら僕が動かそう」
明治の元勳、勝海舟の佩刀、水心子正秀。

「空気が止まっているなら僕が風を起こそう」
膠着した固着した固定した国家を、最低限の出血で切り開いた漢の信念が、

「世界が閉塞しているなら僕が開闢しよう」
今、僕の右手にある。

「どんなに周回遅れのスタートからでも追い抜いてみせる。そう、僕はいつもそうやって来た」
語りかけるのは自分に、エリーシャに、今はこの世にいない家族に、

親が消えてしまつて、震える雛鳥に、

水心子正秀に、いや、刀になる前の母鳥に語りかける。

「大丈夫、みんなは僕が守るから」
幽かに刀が震えた気がした。もう歌えない彼女なりの、それが精一杯の答え。

第二章 26

「取引失敗、交渉決裂か」

ぐいっと体重を掛けてくる『剣聖』。

「そういうこと。君の恐喝暴力に屈しない」

熱い吐息が首筋に掛かる。

「自殺なんてしないし、命乞いだってやらない。だからこれは要らない。君に返すよ」

左手に持ったままの自殺短剣を差し出す。刃先を我が手にしたままで。

「いいよ、餓死だ。とっときなつて。死にたくなったらいつでもそいつを使いな。比較的楽に死ねる。」

あんたにその意思が無いなら無いで…何か、他の使い道もあるかもしれないからなあ。

売払ったらそれなりの値段にやなるしな」

口元を歪めて、皮肉気に晒う『剣聖』。

「そう、それなら貰っておくよ」

手から放して袖口に隠すように短剣を収納。

「じゃあ、容赦なく行くぜ御先祖様。」

自害したほうが楽に逝けたと後悔しな」

「後悔なんて何一つ。」

あらゆる人の後悔と悔悟と諦念と絶望の末に僕が呼び出されたんだろう？

ならば、僕だけはそんなものを感じちゃいけない」

『剣聖』が後方に跳び退る。リプシマ（デイド）の所まで。

『舞風』

同じ顔、同じ声、同じ魂の二人で、同じ技で斬り合いを始める。

「万葉！」

「
四葉よつよう！」

中身の欠けた僕と、僕の欠片による、まるで鏡地獄のような、戦い。

『剣聖』の雨霰と降りかかる刃。

ピリリリ　　一万刃を残った四羽の鵞臨射が弾けるだけ弾いて無力化する。それでも機関銃の如く物凄い数の刃が襲い掛かる。背後のエリーシャを庇う。

足元の雛鳥を庇う。

しかし、右手の水心子正秀の重みがある限り恐れなどは微塵すら。戦闘技術なんて、僕にはない。

神呪天討流の『技』なんて、僕には無い。

ならば、こどもの頃から繰り返してきたやり方を戦闘に応用するしかないだろう。

「
加速」

魔力が全身の隅々まで行き渡る。

思考・判断能力、筋力・神経伝達能力、五感の八倍速化

開始！

第二章 27

「舞風・空蝉うつせみ

七星剣！」

燕のセイが真名を呼ばれて、僕の左手で真の姿に戻る。

ざっと当たりをつけて、秒間十数の刃を弾き返す、返す、還す！
ギギギイリイギリイギャリンジャギリイン

刃と刃の耳をつんざぐ金属音。

「ハッ！」

右手に和泉守兼定、左手に長大な西洋剣火炎剣。フランベルジュ

「さいろう
豺狼」

刃の雨を縫って、地を這うように襲い掛かる『剣聖』。初手は足
薙ぎ、七星剣で止める。続いては、オーバースイングで頭蓋を断ち
割ろうとした火炎剣を、フランベルジュ

「ツケイ！」

逆手に握った水心子正秀で根元から叩き折る。

「ツチ」

舌打ち一つ残して『剣聖』は超低空姿勢のまま脇をそれて通過。
息抜く暇もなく飛来する刃のうち危険性の高いものだけ選んで両
手の刀剣で切り払う。

一本二本なんて数える暇なく秒間十本程度を斬り、払い、弾き、
碎き、割り、崩す。

「蓮香

三秒後に『剣聖』が再び斬りかかって来る。左手には新しく喧嘩
剣ルゲルを握って。刃の雨と雨、その僅かな隙間に側転から身伸宙返りの
飛技を使って。

「うわ！？」

奇抜な動き不安定な体勢からの、首狩り目指した精確な斬撃。重
く強い和泉守兼定の一撃を何とか水心子正秀で受け止め、間髪いれ
ずに顔面に切りかかった喧嘩剣カッパルゲルを七星剣で払い除けた。

が、

ザジュっという肉切り音、貫く衝撃。激痛、

「あ！」

注意を『剣聖』に向けすぎた。刃が左太腿に深々と突き刺さっている。

刹那、視界に翳が差す。目の前には、もう刀刃が

書き連ねられていく。

「ウウウウうらららららら螺良ラララアアアアアアアアアアアアアアアア！」

出鱈目にノ撃墜記録 六十四！ノ水心子正秀を振ってノ一二八！ノ目前の危険からノ一九二！ノぶち壊していく。ノ二五六！ノ切り崩されてノ三三二！ノ光の結晶となる刃がノ三八四！ノ線香花火のようにノ四四八！ノ煌いて消えていった。

五二二！

（よ………し！）

至近の刃を全て叩き壊して、胸中で安堵。

「無様」

耳がその音を伝えた時には

「ミウ！？」

肩口を切られていた。

死角に回った『剣聖』が、容易く僕を切る。

代償として、僕の両手の骨を粉々に砕いて。

（あう……………っつ）

無理な力を使って虚脱した体に緊張が走る。目前に数十の刃が迫っていた。

（やばっ……………）

急いで迎撃態勢を取ろうとするが、一度崩れた集中はすぐには高まらない。ハリネズミのように身体じゅう棘だらけになるのを覚悟したその時、

第二章 30

チチチチ、ピピピ

風と化した鵝臨射四羽がまるで虫を啄ばむように、僕の前の刃を弾き飛ばしてくれた。

「あ、ありがとう」

ぴりりり

鵜のスイが茶目^{つぐみ}つ気たつぷりにウィンクして、最後の刃を咥えて飛び去って行った。

ブツン

安堵とともに、加速が解ける。

体感時間速度が元にもどる。

僕の描いた出鱈目な血線も、ただの血飛沫となった。

『剣聖』は戦いが始まる前と寸分違わぬ所に着地。まるで一連の攻防すら無かったかのように、涼やかな顔。

対してこちらは足と手に致命傷。肩に重傷。手は衝撃に耐え切れずに疲労骨折。再生能力があるから数分もすれば治るが、戦闘能力は格段に落ちる。

何より、完全にガス欠だ。膝が笑っているし、今すぐにでも倒れそうなほどに体内に疲労が溜まりこんでいる。

(……………くそ、加速しても無理か)

常人の速度では完璧に捉えられない世界にまで、今の僕は加速している。速度では、こっちの方が遙かに上なのに　　！！ぎしり、と奥歯を噛み締める。血を流すのは常にこちらの方。

技量に差がありすぎる。

「くつ、はは。御先祖様、自分だけが傷ついてるじゃねえか」

『剣聖』が嘲笑う。

「一つずつギアを上げていかなければ魔法戦闘に対応できない程度の加速じゃ、使い物にはならねえわな」

「いやはやホントに、まだ立ってるだけでも僥倖だなっと自分でも思うよ」

素直に、本当に素直に心情を吐露する。

「コウキ……………君」

心配するように、服の裾をぎゅつとにぎるエリーシャ。

「あはははーどっちのこうきもがんばったねー、ぴかぴかかんかんきんきんざくざくぶしゃぶしゃすごかったねー」

リップシマ（デイド）の幼い物言いが、斬られた痛みを増幅させた気がするが、微笑んで見せる。

「まあ…それなりの収穫はあったけれどね」

「……………あん？」

『剣聖』の目つきが剣呑なものに変わる。

第二章 3 1

僕は右手を力強く振りかざして、叫ぶ。

「兼定！」

隼が、一羽の隼が、僕の呼びかけに応じて

「なん、だと!？」

目を見張る『剣聖』の前をヒュルリと翻って、僕の細い腕を宿木に選んだ。そう、僕を散々苦しめた和泉守兼定の所有権が……僕の元に戻っている。

「君は、僕の『技』だけを盗んで僕の記憶は引き継いでなかったんだよね。だから、知らなくても仕方ないか」

呆氣に取られる『剣聖』。

「この水心子正秀はお父さんの愛刀でね。僕はこの刀の特性・能力を熟知しているんだ」

息を呑むエリーシャ。

「『復古』……それが水心子正秀の固有能力。

この刀に斬られたものは在るべき姿に戻る。だから、君に奪われた僕の兼定は」

ぽやーんと微笑むリプシマ（デイド）。

「水心子正秀が切った兼定は、僕の所に戻ってくる。それが、道理」
「……………そんな、反則」

「それとき、君の刃を破壊して刃に込められていた魔力を有効活用させてもらったよ」

僕が言葉を放つと同時に、瓦礫の山と化していた絶滅回避螺旋階段が、

「破壊したのは六百本弱。それだけの魔力があれば、まあ、思い出を残すぐらいには」

音もたてず、静かに、

「そして、ささやかな小鳥の御宿を復元するくらいにはなったかな」
水が大地に滲みこむように、当然の様に速やかに、
「闘争で荒らすには、ここは悲しすぎる」

アカリが作り、

ヒカリさんが守った、

鳥類絶滅回避研究所は、

僕の手すいしんしまひでの力で元の姿に戻った。

「僕は剣聖きみにまるで敵わない。」

「だけど、アンヴァリッドの再生能力と、極限までの加速能力があれば、それなりに太刀打ちできる」

痛みに耐えながら、

「そして打ち合えば打ち合うほど君の獲物は減少して君の戦闘力は低下していく。水心子正秀の『復古』能力で削られて、破壊された思い出を戻すための魔力として消費される」

のたうち廻りたくなるほどの痛みに耐えながら、

「それでも、まだ続けるかい？」

僕を『塵こころし』きれない、中途半端な『剣聖』君」

『剣聖』の瞳を見据えて、大見得を張る。

「なんなら 君の全てが骨抜きになるまでチャンバラにつきあってもいいけれど？」

第二章 32

「水心子正秀、か……また厄介なものを作られちゃったな」

『剣聖』がガリガリと頭を掻いて苦笑する。

「せっかく飲み込んだ刃物が六百本も御釈迦になっちまったとはねえ……はは、アレだけ痛い思いをしたというのに」

続いて顎に手を掛け、値踏みするように僕を見て、

「今のまま殺りあっても割りに合いそうにねえな。折角手に入れた鵜臨射が無くなったんじゃ意味が無さ過ぎる」

溜め息一つ、苦笑も一つ。それで結論が出たらしい。

「帰ろうか、リプシマ（デイド）」

「えー」

リプシマ（デイド）はあからさまな反対。

「こうきだけずるいー、でいどもこうきとあそびたいー」

「どうせ聖戦アマキディオが始まれば嫌でも面合わせるんだ。その時の楽しみに取っておけ」

手足をバタバタさせて抗議するリプシマ（デイド）を丸めこんで、
「次に会う時は、きっちりと塵こころしてやるよ。」

俺と、リプシマ（デイド）と、ガモンハイド様と、数少ない人間の未来の為に」

『剣聖』はニヤリと晒う。

「自ら死ななかった事を底なし沼のごとく悔やんで悔やんで後悔しつくすまで痛めつけてやるから……楽しみに待っててくれよ、御先祖様」

「それは嫌だな…できれば御手柔らかに」

ハハっ、と二人して笑う。鏡地獄のような同じ貌かおが、硬軟こつやんたが違って

笑みを作る。

闘争の気配は薄れ、

「ああ それと」

思い出したように、去り際に一言。

「御先祖様の口唇、結構美味しかったぜ」
ブーーーーー！

盛大に息を噴き出しつんのめる。

「さっ……さっさと帰れーーーーー！」

顔が火照るのを誤魔化すように大声を張り上げた。

第二章 33

暗い暗い闇の底の底。

絶滅回避研究所は、元通り。

闘争に巻き込まれて怪我した鳥達も、水心子正秀の能力で治癒されて、元通り。

「エリーシャ……僕……強く、なりたい」

先に言葉を漏らしたのは僕の方。

だけど戻らないものも幾つかあつて。

戻らないものは、掛替えの無いもので。

冷たくなつた幾つかの骸が、切々と物言わず訴える。

「強く……なりたいよ……」

覚悟を決めた。決心は付いた。

僕がやらないといけないということが、心の奥底まで深く刻み込まれた。

手には水心子正秀の重み。

それは新たに死した生き物の重み。

二度と戻らない命に、遣された雛は乞い願う、謳いながら。

「コウキ君は……十分強いです」

エリーシャが血塗れになつた僕をハンカチで拭く。

「コウキ君は、凄く強い『心』の持ち主」

血を拭われる度に身が清められる想い。

「でも、心なんて強くても」

あれほどの技量の差、敵わない実力差は覆せない

という言葉が続ける前に、

「どうして『心技体』という言葉がこの順番なのか分かりますか？」

エリーシャの矢継ぎ早の言葉に断ち切られた。

「心の強さが、他の何よりも重要だから。」

間違っても体の強さではなく、決して技量の優劣が重要ではないから」

黄金色のエリーシャの髪が、僕の胸元で眩しく輝く。

「心が、心の強さがなければ、技も身体もどれほど優れていても仕方ありません」

少し背伸びして僕の首筋、頬の血を拭うエリーシャ。血臭は薄れて、エリーシャの甘い香りが鼻腔をくすぐる。

「心が強ければ、どんな困難にも立ち向かう心が強ければ……」
「技」や「体」の優劣なんて瑣末なことです」

胸元に引き寄せた手を両手で包んで微笑むエリーシャは、まるで天使のように……

「盗まれた『技』の分も奪われた『刀』も全て取り戻せるように、私が鍛えてあげます」

……訂正、補修を受けることになった生徒を励ます教師のように見えた。

だからごく自然と、当然のようにこんな言葉が口から飛び出した。
「うん、お願いしますエリーシャ先生」

『先生』という言葉がどういう効果をもたらしたのか、
「はい。必ず私がコウキ君を強くしてみせます」

エリーシャはまるで結婚式の花嫁のように、笑って見せた。
エリーシャは一度大きく頷いて口を開き、

「コウキ君」

しかし目線を切って下を向き、胸の前で手を合わせ、迷いの表情をみせる。

「……………エリーシャ？」

「私と……その……あの……」

小さな声ではそばそと呟いた後、

「あ……あのー……えっと……」

真っ赤になって、息を吸って、思い切って、一言。

「ね、ね、ね、ね、寝て（・・）！」

「& a m p ; # 9 7 3 2 ; ; ! & a m p ; # 9 8 3 2 ; ; ! ? ふええ ? ! & a m p ; # 9 8 3 2 ; ; ! & a m p ; # 9 7 3 2 ; ; !」

「くれま・す、か………？」

尻すばみに小さくなるエリーシャの声と、林檎よりも真っ赤になった頬が鮮烈に目に焼きついた。

暗い暗い闇の底の底。

絶滅回避研究所は、元通り。

死んだモノは鳴かないけれど、生き残ったモノは鳴いていた。

精一杯、歌ってた。

第三章 1

第三章 破壊と殺戮の楽しい一日

シャアアアア.....

水音響く軽やかに。

ドクン ドクン ドクン ドクン。

心音響く不定期に。

時計は速やかにミッドナイト。
こどもはおねむの時間です。

僕はベッドサイドに腰掛けて、

エリーシャがシャワーから上がるのを待っています。

.....

ああ、すいません。

少し脳味噌が停止していました。

実際、思考回路がショートしています。

ちよつと間

落ち着け、落ち着くんだ！

現状況はエリーシャがシャワーを浴びているだけの事！

何も焦る事などないのだ！

今居る所はエリーシャが偽名で秘密裏に手に入れたセーフハウス！

隠れ家だからちよつぱり狭めの部屋に二人つきりです！

夕飯は一時間前に済ませました！

緊張してたから味なんて全く覚えておりません！

鵜臨射への餌やりも済ませました！

てゆか、魔法生物の癖にどうして餌が要るんだオマエラ！ええいこの食いしん坊め！

& a m p ; # 9 8 3 2 ; シャワーは僕の方が先に済ませた！& a m p ; # 9 8 3 2 ;

ああ、念入りに洗ったさ隅々まで！

そう！あとは寝るだけだ！

寝る……………だけ……………

あとは& a m p ; # 8 6 2 8 ;

エリーシャと& a m p ; # 8 6 2 8 ;

一緒に& a m p ; # 8 6 2 8 ;

寝るだけ& a m p ; # 8 6 3 5 ;

数時間前の、林檎のようなエリーシャを思い出す。

『私と寝てくれますか……………』

……………精一杯の勇気で張り上げた声と共に。

シャアアアア……………

水音響く軽やかに。

ドクン ドクン ドクン ドクン。

心音響く不定期に。

《取り止めのない妄想開始……………コウキ君の名誉の為に省略》

ぶんけ ふんけ つぶん

ん い ない ゆ け

さ か な か じ いか

《……………妄想続行中》

エリーシャが、冷たい目つきで、

（高校生なのに×××（ピー）ないなんて……………みつともないです
ね）

なーんて、冷静になじられたりしたらもう立ち直れない事は確実！一生のトラウマになってしまいそうだ！

てゆかなんでこんなにテンパってるんだ僕は！？しかもネガティブかつ特殊な方向に！

十数分の煩悶の末にようやく我に帰る。

「コウキくん……………」

すと……………っぷ！妄想禁止！

ああ、天国のお母さん、申し訳御座いません。人生でただの一度も経験のない出来事を前にしてなんだか情緒不安定になっております。みっともないことに。

「……………えっと……………どうしましょう、コウキ君が何だか壊れて……………」

第三章 2

しかし僕が年上としてリードするのが当然なのだろうか？経験なんてないのに？しかしエリーシャってデイドの記憶があるんだよね、ということはエリーシャの方が（精神年齢的に）年上なのかなあ、デイドって大人の女だもん^{ひと}な、経験とかきつとあるんだろっな、当然だよなあに美人なんだもんあ、でもエリーシャは完璧に（外見的に）年下だしなあ、アカリより年下じゃないかなあ、あんなに小さいしなあ、てゆかあんなに小さい子を相手にするのって倫理的にはんざ

「……………あの」

「ひゃう！？」

首の後ろを触られて、思わず悶絶した。

「え、ええええええええええ、エリーシャ何時の……………」

驚き、振り向き、淡く微笑むエリーシャの姿が飛び込んできて……………

「あ、やっと気付いてくれましたね」

「……………間、に……………」

……………固まり、息を呑み、言葉を、失った。

純粹に、何一つ混じる事のない、美の化身がそこにあった。

如何なる奇蹟が、こんなにも美しく穢れ無き芸術を創りあげるとい
うのか。

水気を含んで、艶を増した黄金の髪。ふわりと漂う甘い香り。

薄手のネグリジェを身に着けて、湯上りの上気し桜色に染まった肌
がチラチラと見える。

魔法処理された戦闘用聖服と違って、純粹な女の子らしい格好に新
鮮味を覚える。

凜とした、人を拒絶するような、超然とした雰囲気は薄れ……………

そこには、可憐な少女が一人。

僕の記憶の中のアカリと同じ位、小さな体……それでも……少しだけ『女性』としての発育が服の下で主張しているのは、やはり東洋人よりも発育がいいからだろうか。

……
ああ、すいません。

息をするのを忘れていました。

実際、過去にないほど緊張しています。

……
「そ、その……そんなに見つめないで下さい」

「あ、ああ！ゴメ、いやそのあまりにも」

肩を抱くように腕を交差するエリーシャに、慌ててバタバタと手を振る。見てないよー見てないよー変な所は見えないよーという代わりに。

「……その……綺麗……だから」
つい、とっさに出たのは偽らざる心情で。

二人してトマトのように赤くなって、黙り込んでしまった。

「あ、あの……恥ずかしいんで、明かり、もう消しますね」
パチン

「え、あ？もう！？」
心の準備が出来ない内に、明かりが消える。視界は全て暗黒に変わる。

一つのベッドが二人の重みで軋む。

「私……始めてなので上手くできるかどうか分かりませんが……」

……

「は、ハハはハハハは！『初めて』！？あ、いや、その……僕も……」

……は、初めてだから……うまくできる自信はないけど」

こちらにしなだれかかってくる気配に、僕の頭も身体も暴走寸前で、

「……ええつと、全部私に任せて下さい。出来る限り痛くしない

ようにしますから」

「えっ、いや、そのセリフ言うの逆……」

（あれ、何か会話噛みあってない？）

違和感一つ。と、思う内に、

「あ、あれ？えっと何ですかその棒状のものは？どうしてそんなものがあるのかな？」

手に触れる何やら硬質の感触。過熱していた心は不振物を発見して一気に冷却へ。

「…………力を抜いてください」

「てゆか、え？え？なにそれ？どゆこと？」

「えい」

ポカ

「うみゃ！？」

あ、お星様が見えたよ

第三章 3

「あ……………れ……………？」

気がつくと、見慣れた所にいた。

空は青く、大地には草花芽吹き、風が吹けば木立に葉がざわめく。
赤煉瓦の屋根、白亜の校舎が立ち並ぶ学園都市、国連大学付属魔法学校（UNUMS）の、母校の、総合武道訓練場……………通称『バトルクリーク』。

見間違っ事など無い見慣れた景色。でも、

「……………ゆめ……………？」

感じる気配、空気の密度が違う。

……………人の気配は無い、孤独な夢。

この風景から受け取る印象は、寂寥と寂寞。
昨日まで、ほんの数十時間前まで当然の様に通学し、勉強し、運動し、遊び、生活していた環境が、今は、遠い、遠い夢物語のよう……………これが夢だと理解できてしまう、悲しい明晰夢。

金属の空と生命維持装置なくば死ぬまで四秒の月でなく、
優しい空気に包まれた、地球の光景。

当然のように過ごしていた世界が、今では、とても、とても……………遠い。

「夢のまた夢……………美しく、そして儚い言葉だと思いませんか、コウキ君」

「エリーシャ……………て、わわ！？」

振り向いて、

「えりい……………しゃ？」

……………再び、言葉を失った。

瞳に映るは、森羅万象を統べる『神仙女王』の風格と気品。

「やっぱり、コウキ君は年上の女性の方が反応が大きいですね」

大人の余裕を持った微笑浮かべて、子犬か何かになったように撫で

られる僕の頭。

日本人の平均より高い身長がハイヒールによって更に高くなっていて、平均身長を下回る僕の目線に、ちょうど彼女の胸がある。

目の前には、服を盛り上げて我が儘な自己主張をしている大きな胸。

「でい……………ど？」

「ふふ、コウキ君と始めて会った時の格好をしました」

それはこの世の者とは思えない、美しい女教師だった。

それは盛大に咲いた大輪の華。蕾ですら一つの芸術だったものが、花開いて一つの神秘にまで昇華していた。

そして…色々控えめだった『ちんまい』エリーシャが、色々ワガママな『おつきな』デイドに変わっていた。ああ、アダルティー。

「どうなさいましたコウキ君？耳まで真っ赤になっちゃって、金魚さんのようにお口をパクパクして」

息を呑む。息が荒くならないように。

心臓は爆発しそうなほど、血管は破裂しそうなほど……………ものすごく『甘えなくなる御姉さまの魅力』に耐えて、ようやく声を絞り出した。

「う、あ、え、お、う……………あうあう、す、すいません」

「ふふ、コウキ君ったら……………本当に初対面の時と同じ反応をしましたね」

口を手を当てて上品に微笑むエリーシャ（デイド）。

「此処は夢の中ですから、少々自分の姿を変える事もできるのですよ。それで、折角ですからデイドのスタイルになってみました」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8544c/>

アマギディオン ～いつか見た空の青の下で～

2011年1月15日23時30分発行